

かし　お　みなみ  
柏尾南遺跡

——長野市消防局七二会分署庁舎建設地——

1997・3

長野市教育委員会

## 序

長野市の市域404.8km<sup>2</sup>の中に1300余ヶ所の遺跡が周知されています。そのほとんどが長野盆地とその周縁に散在しています。中でも千曲川によって形成された自然堤防上、そして浅川・裾花川・犀川の堆積による扇状地上には弥生時代以降の大規模集落跡が発見されつつあります。これに対して西山地域と呼ばれる山間地では縄文時代・平安時代を主体に小規模なものが点在しているにすぎず、発掘調査事例も数件にすぎません。

さて、ここに第二次長野市総合計画及び広域消防常備化整備計画に基づき、七二会地区及び小川村・中条村を対象区域とする消防・救急業務の充実強化を図るため庁舎の建設が具現化してまいりました。建設地は七二会地域でも大きな遺跡の一つである柏尾南遺跡、そして古墳時代遺跡として注目されていた地でもあります。事業の公共性・緊急性を鑑みとり急ぎ発掘調査を実施いたしました。

その成果を本報告書として刊行いたしました。何分単年度事業としての業務であるという制約、調査対象が開発事業内ということから充分な考察ができませんでしたが、山間地の古墳時代・古代人の生活の一端を垣間見ることができる貴重な資料を得ることができたと自負しているところであります。本書が地域文化向上のための一助として、また埋蔵文化財に対する一層のご理解のためご活用いただければこの上ない喜びであります。

最後に、発掘調査の実施にあたりご協力・ご支援をいただいた関係機関・各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

長野市教育委員会教育長 滝沢忠男

## 例　　言

- 1 本書は、長野市消防局七二会分署庁舎建設工事に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。その期間は、平成8年7月29日から9月11日まで実質24日である。
- 3 調査地は、長野市七二会字柏尾南561番地他である。
- 4 保護対象面積は、2,605m<sup>2</sup>である。
- 5 本書は、発掘調査によって検出された遺構・遺物を中心に、基本資料を提示することに重点をおいた。
- 6 遺構の測量は、平面直角座標値と日本水準原点の標高を基準とし、コーディクシステムを採用するため㈱写真測図研究所へ委託した。
- 7 住居址等の遺構図は、1:20の縮尺を基本図にして、1:80の縮尺で掲載した。カマドは1:20、溝址は1:40と1:80で提示した。
- 8 遺物図は、1:4を基本として図示した。土器実測図の断面白抜きのものは土師器、黒塗りのものは須恵器を表現する。器形内の網掛けは黒色処理されたことを示す。
- 9 断面図基本線の数字は標高値である。
- 10 遺跡の略号は、「KSM」である。また遺構の略号は、住居址がSB、土壤をSK、溝址をSDとした。
- 11 発掘調査から報告書刊行に至るまでの作業担当者等については、II-3調査の体制を参照にされたい。
- 12 航空写真は、長野市建設部道路課の承認のもとに㈱ジャステック社、現地説明会の写真は七二会公民館が撮影したものである。また詳細地形図については庁舎建設造成計画図より作成した。
- 13 調査によって得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。

## 目 次

序

例 言

目 次

I	調査地周辺の環境	1
1	地理的環境	1
2	考古学的環境	6
II	調査の経過	9
1	調査の事務経過	9
2	調査日誌	9
3	調査の体制	11
III	調 査	13
1	調査地と地形	13
2	調査の方法	16
3	遺構の分布	16
4	土層序	20
5	古墳時代の遺構と遺物	20
6	平安時代の遺構と遺物	30
7	近・現代の遺構	45
8	遺物観察表	47
9	遺物写真	50
IV	ま と め	53

## 挿 図 目 次

1図	長野市域模式図	1	2 2図	4号(左)・5号(右)土壠実測図	29
2図	西山山地地形図	2	2 3図	4号(1)・5号(2)土壠出土土器実測図	30
3図	長野市防災基本図地形分類図	3	2 4図	3号住居址実測図	31
4図	長野市防災基本図表層地質図	4	2 5図	3号住居址出土遺物実測図	32
5図	七二会地区の遭跡分布図	6	2 6図	5号住居址実測図	32
6図	柏尾南遭跡出土土器実測図	7	2 7図	5号住居址出土土器実測図	33
7図	調査地及び周辺地形図	13	2 8図	6号住居址実測図	33
8図	調査地地形図	15	2 9図	7号住居址実測図	34
9図	地形及び遭構分布図	17	3 0図	7号住居址出土土器実測図	35
1 0図	遭構分布図	18	3 1図	8号住居址出土土器実測図	36
1 1図	再地すべり状地形上限実測図	19	3 2図	8号・12号住居址、9号土壠実測図	36
1 2図	再地すべり地形土層図	20	3 3図	9号住居址実測図	37
13-1図	1号住居址実測図	21	3 4図	11号住居址実測図	38
13-2図	1号住居址出土土器実測図	22	3 5図	13号住居址出土土器実測図	39
1 4図	2号住居址実測図	22	3 6図	13号住居址実測図	39
1 5図	2号住居址出土遺物実測図	24	3 7図	ピット群(2)実測図	39
1 6図	4号住居址実測図	25	3 8図	ピット群(1)実測図	40
1 7図	4号住居址カマド実測図	27	3 9図	1号土壠実測図	40
1 8図	4号住居址出土遺物実測図	27	4 0図	平安時代土壠実測図	42
1 9図	10号住居址実測図	28	4 1図	1号溝址出土土器実測図	44
2 0図	10号住居址出土遺物実測図	29	4 2図	2号(左)・5号(右)溝址実測図	44
2 1図	2号土壠出土土器実測図	29	4 3図	3号(左)・4号(右)溝址実測図	45

## I 調査地周辺の環境

### 1 地理的環境

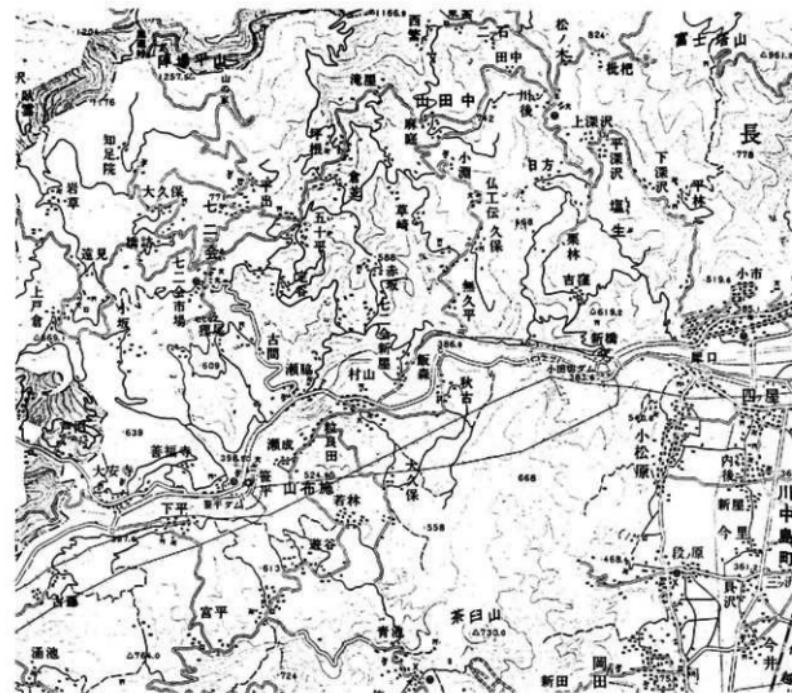
長野市は東側に火山性の保谷岳（1,529m）・妙徳山（1,294m）に代表される山地が形成されるのに対し、西側は海底隆起による平坦な山地地形になり、西山あるいは西部山地と呼ばれている。その東西間、犀口から若穂綿内まで直線にして11kmに長野盆地（善光寺平）が展開する。その主体的形成は千曲川がもたらした堆積土による沖積面が大きな役割を果たしている。これに対し西部山地を横断流下する浅川・裾花川・犀川の下刻浸食による堆積土は千曲川のそれよりも大きく凌駕し、千曲川を東側山麓付近まで追いやっている。ちなみに犀川の長野盆地出口である犀口から千曲川と合流する綿内落合橋までの比高差は40mになる。また犀川が開削した扇状地は千曲川下流犀島北、上流では唐猫付近まで影響を及ぼしている。犀川左岸域21.7km<sup>2</sup>・右岸域49.8km<sup>2</sup>、合計71.5



1図 長野市域模式図（約1:250,000）

kmの面積になるものと考えられ、多量な堆積土量であることが窺える。

さてこのような土砂流失地の西山山地に属する七二会地区は、明治5年に総村としての瀬脇・五十平・倉並・橋詰・兼平・大安寺・岩草の7ヶ村と枝村代表の古間・坪根の2ヶ村が合併して七二会村として誕生した。合併改称の村名の由来は定かでないが、総村7ヶ村と枝村2ヶ村という意識が強く残っていたものと考えられる。これらの9ヶ村は北側に富士塔山(998m)・陣馬平山(1,258m)・虫倉山(1,379m)等の山岳が連なり、その山腹・山麓に位置する。斜面は南から南東に展開し、地すべり等の土砂崩落及び残丘により複雑な地形を形成する。この斜面に東から保玉沢・泥沢・清水沢・除沢等が流下し、下流に行くに従い下刻浸食が増し、多量の土砂を流失した様子を知ることができる。これと前述した海底隆起地形・堆積土壤であるため一層の地すべり地帯となっている。地質的には陣場平山周辺に火山性の安山岩溶岩が認められる他は七二会地区のほとんどが中新統から鮮新統にかけての論地層・大久保層と呼ばれる泥岩・砂岩および泥岩砂岩互層からなる。このほか市場・古間地籍及び遺跡立地の瀬脇地区には段丘地形になり、砂・礫の堆積物で覆われる。このような地形・土質は耕地への影響も大きく地すべり、崩落による平坦斜面には棚田状の水田利用がなされているものの10°~30°の傾斜地が大部分を占める陣場平山腹山麓は畠地となる。標高は陣場平山を最高にして、遺跡前面の犀川底面を380m前後で、その比高差は約877.5mを測る。



2図 西山山地地形図(1:50,000)



明瞭な地すべり

段丘低位面

下位面

上位面

不明瞭な地すべり

崩壊地

畦跡

层状地

3図 長野市防災基本地形分類図（1:25,000）



Tu 角礫・砂・泥および粘土（崩積堆積物） Te 砂・礫（段丘堆積物） Og 砂質泥岩（大久保層） Js 砂岩・礫岩（城下解）  
Ok 泥岩・砂岩および互層（大久保層） Ro 泥岩・砂岩および互層（諏訪層） Ap 安山岩溶岩（虫倉山火成岩層）

4図 長野市防災基本図表層地質図 (1:25,000)



I-1 柏尾南遺跡周辺の航空写真（平成2年6月撮影）

集落間を結ぶ道路は山間地特有の九十九折をなし、屈曲度の大きいもの程急傾斜を示している。また山間（雜木林間）は地すべり地形を利用して棚田を形成する。比較的平坦地に集落が点在する。山腹では市場が大きく、支所（旧役場）、公民館・小中学校があり、古くは春日氏の居館跡が残る。犀川流域では笠平・瀬駒の集落が大きい。交通・物資流通の要衝として発展した。ただし古開墾地は昭和年代後半に塗造されたものである。犀川においては、上流に東京電力柿平発電所が建設され、通常の流下する水量は少ない。撮影時の水量は多めで蛇行する荒瀬ではハレイションが起り、その急流ぶりを窺わせている。更に水量減は泥沢の堆積土により流域を対岸に押しやっている。山間地を下剝浸食する沢の押し出し土量の多さを物語っている。

## 2 考古学的環境

七二会地区における考古学的調査が実施されたのは七二会村が長野市との合併を機に、村議会は先人の生活記録を後世に伝承しようと村誌の編纂を議決したことから始まったといつても過言ではなかろう。昭和42年以降村誌の刊行までこの調査は主として笛沢浩氏によって行なわれた。その成果にそって記述する。なお『長野県史』を県史、『七二会村史』を村史と略称する。

1 知足院遺跡 久昌寺西方の緩斜面から平安時代土師器壺・甕片が採集されている。主たる遺跡の存在は知足院集落内と予想される。

2 平沢遺跡 平出平沢に位置し、平安時代土器が採集されている。

3 矢口遺跡 平出矢口に位置し、石切り工事の際に発見された遺跡で、縄文時代前中期の十三菩提式土器片が見られ、奈良時代と推定される木葉痕を底部に残す甕片が採集されている。

4 二十三夜塚遺跡 平出部落の北方に位置する。陣場平高原への道路改良のため既に半壊されていた。このため幸いにも遺構断面が観察され、七二会地区で初めての発掘調査の契機となった。発見された住居址は一辻5.4mの方形をなすものと推定される。出土遺物は平安時代の土師器壺・楕・甕及び鐵滓があるにすぎない。

5 平出水上遺跡 平出部落の中央付近の西ノ沢川による扇状地形状の緩斜面に位置する。遺跡の年代は縄文時代中期から後期にわたるもので、その土器形式は勝坂式・加曾利E式、後期の称名寺式・堀之内式である。石器には打製石斧・磨製石斧・石棒・石皿・石匙・石錐・石鎌があり、その量も多い。中でも有茎の石鎌が半分以上を占めており、主体は後期に比定される遺跡であろう。県史では水上遺跡と呼称する。

6 堀端遺跡 市場字堀端の舌状台地上に位置し、縄文・弥生時代・古代にかけての複合遺跡である。縄文時代中期の勝坂式・加曾利E式、後期の堀之内式が出土している。石器には打製石斧・磨製石斧・垂玉・石錐がある。弥生時代では中期でも古式と推定される長頭壺と後期の土器片が認められる。七二会地域における唯一の弥生時代遺跡である。その後次に生活の痕跡を残すのが、古代に至ってからである。奈良時代で



1 知足院 2 平沢 3 矢口 4 二十三夜塚  
5 平出水上 6 堀端 7 論地A 8 論地B  
9 柏尾南C 10 柏尾南B 11 柏尾南A 12 芝宮  
13 横前道下 14 中尾・田尻

5図 七二会地区的遺跡分布図(『七二会村史』より)

は須恵器長頸瓶片、平安時代では多くの土師器・須恵器が出土しており、その主体器種は壺・甕等の日用什器類である。

7・8 論地遺跡 論地地籍の保玉沢と隠沢の下刻によって形成された南向舌状台地上に立地する。村史ではA・B遺跡と分離するが、地形的には同一遺跡と考えたい。遺物は縄文時代中期全般に亘ってのもので、五領ヶ台式・勝坂式・加曾利E式の土器及び石鋤・打製石斧・スクレイバー・石棒等の石器類が出土している。

9・10・11 柏尾南遺跡 村史では3地点遺跡を設定するが、A地点は現在国道18号線篠平トン

ネル工事業地にあたっており、事前の試掘調査によると遺構・遺物の確認はなかった。またB・C地点は地形的にみて同一遺跡と考えても良い。遺跡は東流下刻するふくろ沢と清水沢によって形成された舌状台地状の緩斜面に位置する。B地点から古墳時代中期の土師器壺・高杯等が発見され、他地点からは、平安時代の須恵器・土師器片が採集されており、石組のカマドの存在も予想されている。七二会地域における大規模遺跡の一つである。

12 芝宮遺跡 古間地籍の守田神社周辺から平安時代の土師器・須恵器片が出土している。

13 横前道下遺跡 篠平地区の善福寺沢左岸段丘上斜面に位置する。室町時代と推定される五輪塔の地・空輪の下から須恵器大型片の集積を伴って発見されている。中世の墳墓址と考えられている。

14 中尾・田尻遺跡 岩草中尾地籍の南斜面に位置し、縄文・古墳時代及び古代の複合遺跡である。縄文時代では中期の五領ヶ台式・加曾利E式土器・打製石斧・磨製石斧・石匙等の石器が採集されている。古墳時代では後期の土師器壺・壺が出土しており、平安時代では土師器・須恵器片が多く確認されている。この他に中世に比定される須恵質の擂鉢片がある。県史では中尾遺跡・田尻遺跡と別遺跡とされる。

この他県史では以下の遺跡の所在を記載する。

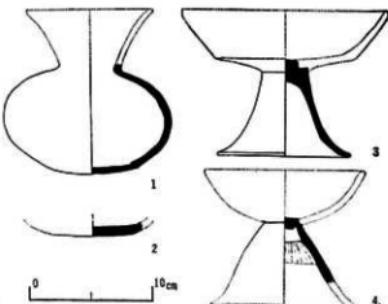
ミルメ遺跡 倉並 (縄) 磨石斧

御屋敷遺跡 篠平御屋敷 (縄) 打石斧・磨石斧 (平) 土師器

萩野城跡 橋詰萩野 (中) 本郭・二ノ郭・腰郭・竪穴式倉庫

戸屋城跡 橋詰戸屋 (中) 土塁・井戸

以上七二会地区の遺跡及び内容を記してきたところであるが、その要点を垣間見る。縄文時代前期木槧に最初の遺跡が確認される。ただ少量の土器片のみの採集であるため住居址等の生活遺構の存在は不明である。中期に至ると論地遺跡・水上遺跡・堀端遺跡・田尻遺跡で小規模ながら集落が営まれた可能性が高い。後期の遺跡は全県的に激減する時期である。七二会地区でも2遺跡が確認されているにすぎない。生活遺構の存在が予想される遺跡に水上遺跡がある。中期の土器片が少ないと、石鋤の形態特色から後期前半を主体とする遺跡と考えられる。次に痕跡を残す時代のものは弥生時代中期栗林I式土器に比定される壺形土器、後期箱清水式土器片が発見されている堀端遺跡である。善光寺平では大小の河川の扇状地・自然堤防上に大集落を形成し、水稻栽培が行なわれた時期である。七二会地区では果たして可耕地が存在し、定住化するだけの生産量があったであろうか。今のところ否定的な見解しか浮かばない。採集遺物量の少なさもこれを裏付けている。古墳時代では中期に至って柏尾南遺跡が、後期では水上遺跡・中尾遺跡の存在が知られるものの古墳は構築されない。古代特に平安時代



6図 柏尾南遺跡出土土器実測図(1:4)  
(『七二会村史』より)

になると湧水・平地を求めて遺跡が増大・拡散していく。しかし地形・生産可耕地の制約から小規模な遺跡が目立つ。集落が形成されたと予想される遺跡は、水上遺跡・田尻遺跡・柏尾山遺跡があるにすぎない。二十三夜塚遺跡からは住居址1軒が検出されている。この時期の山岳地への進出は全県的な傾向で、出土遺物の中に鉄鋤の存在が注目され、何か職能工人の存在が考えられる。やがてこれらの遺跡も小川庄や丸栗庄に組み入れられ、春日氏の支配するところとなり、戸屋城・萩野城・笛平城が築かれた。尚、笛平城は篠平城とも呼ばれ、御星敷遺跡と重複する。瀬脇地区に瀬脇の城との伝承があるが、規模・年代・築造者等は不明である。

【参考・引用文献】

笠沢浩「七二会の考古学的調査」『七二会村史』七二会村史編纂会 昭和64年

『長野県史考古資料編』全1巻(1)遺跡地名表 昭和56年

『長野県の中世城館跡—分布調査報告書—』長野県教育委員会 昭和58年



I - 2 現地説明会

## II 調査の経過

### 1 調査の事務経過

平成7年10月6日付 「平成8年度以降建設・土木工事計画（市内）の照会について」を関係部課・機関に依頼する。

10月23日付 消防局総務課長より「七二会分署庁舎建設」の回答がある。

11月20日付 「試掘・発掘調査」の保護措置の必要があり、発掘調査と事業計画との円滑な調整を図りたい旨、保護協議を依頼する。

平成8年4月2日付 長野市長塚田佐より文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」の提出がある。

同日付 長野市消防長岡村栄之助より「開発行為にともなう埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」がある。

4月5日付 上記書類に「開発予定地は柏尾南遺跡の範囲内にあり、工事に先立ち記録保存による埋蔵文化財発掘調査等の保護措置が必要」である旨の意見を付して長野県教育委員会教育長（以下県教委という。）宛に進達する。

同日付 文化財保護法第98条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を県教委経由で文化庁長官宛提出する。

4月23日付 県教委より長野市長・長野市教育委員会教育長宛に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」がある。

7月18日付 七二会地区区長長北嵩貞一へ瀬脇区・篠原区各区長宛「発掘調査参加者募集の回覧について」を依頼する。

7月29日付 株式会社山口建設代表取締役山口勝男と「重機等賃貸借単価契約書」を締結する。

7月29日～9月11日 発掘調査を実施する。実質稼動日は24日である。

8月1日付 ㈱山口建設代表取締役と「仮設トイレ賃貸借契約書」を締結する。

8月20日付 株式会社写真測図研究所代表取締役杉本幸治と「柏尾南遺跡遺構測量等業務委託契約書」を締結する。

9月13日付 「発掘調査終了届（通知）」を県教委・長野市消防長宛に提出する。

同日付 「埋蔵物発見届」・「埋蔵文化財保管証」を長野中央警察署長宛に提出する。

11月8日付 県教委より「埋蔵物の文化財認定（通知）」がある。

平成9年3月25日付 「柏尾南遺跡—消防局七二会分署庁舎建設地一」を刊行する。

### 2 調査日誌

7月29日～31日 調査地の中央付近を斜めに横断する農道を境に下段をA地区、上段をB地区とする。A地区末端より標高に沿ってトレント掘にて表土除去作業を行う。発掘調査器材を搬入する。

8月1日（晴） トレント内の遺構確認作業を行う。土壤が強度な粘質土で作業が捗らず。バックホーにてA地区的遺構確認地点の拡張・露呈作業を実施する。

8月2日（晴） バックホーでB地区の表土除去作業を開始する。SD1の検出後調査を開始する。

8月5日（晴） SD1調査継続（6日まで）、新たにSB3（7日）、SK2（6日）の調査を開始する。

8月6日 SB2・13（7日）の調査を開始する。

8月7日（晴） SB5（9日）、SD2（9日）、SD3（19日）、SK3（8日）の調査を開始する。SB3の写真撮影。

8月8日（晴） 昨日の調査を継続する。SK3及びSB3カマドの断面実測作業を行う。SB3・SK3の写真撮影。

8月9日（晴） バックホーにてSB1周辺の拡張、B地区の表土除去作業（20日）を行う。

8月12日～16日 盆休み。

8月19日（晴） SB4（21日）、SD4（20日）、SD5（21日）、SK2（20日）の調査を開始する。SD3の写真撮影。既完掘遺構の測量を行う。

8月20日（晴） 昨日の調査を継続する。遺構測量図を作成する。

8月21日（晴） SB1（23日）・5（22日）・6の調査を開始する。SB4、SD4の写真撮影。

8月22日（晴） SB7・8（9月3日）、周辺のピット群（23日）の調査を開始する。

8月23日（晴） 昨日の調査を継続する。SB1・2・5・6、ピット群の写真撮影。

8月26日（晴） SD1の落ち込を追求する（4日）。第2回既掘遺構測量を行う。

8月27日・28日（雨） 作業休止。

8月29日（晴） 調査継続。SB4カマド平面実測、遺構実測図を作成する。

8月30日（晴） 定例会にて作業休止。

9月2日（晴） SK6（3日）の調査を開始する。SB4カマド、SK6の断面実測作業を行う。

9月3日（晴） SB7・8の写真撮影後、SB9（5日）の調査を開始する。

9月4日（晴） SK7・10の調査を開始する。

9月5日（晴） SB10（6日）・11の調査を開始する。SK7の断面実測作業を行う。



II-1 8月1日



II-2 8月22日



II-3 8月23日

9月6日（晴） SB10の完掘後、SB9～11、SK7の写真撮影。SD1トレンチ、SD5土層断面実測作業を行う。本日にて現場での発掘作業を終了する。器材撤収。

9月10日（晴） 第3回完掘遺構測量作業を行う。七二会支所・公民館主催による現地説明会を開催する。約50名参加。

9月11日（晴） 遺構実測図を作成し、発掘調査を完了する。



II-4 9月3日

### 3 調査の体制

長野市内における緊急発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施、発掘調査における組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	滝沢忠男
総括管理者	埋蔵文化財センター所長	丸田修三
庶務係	所長補佐兼庶務係長	小林重夫【契約・出納事務・庶務】
"	職 員	青木厚子【〃・〃・〃】
調査係	所長補佐兼調査係長	矢口忠良【発掘調査指揮・報告書作成】
"	主 査	青木和明【事前協議担当・予算計画書作成】
"	"	千野 浩【事前協議担当】【遺物写真】
"	主 事	飯島哲也
"	"	風間栄一
"	"	小林和子
"	専 門 主 事	清水 武【調査員、土器復元・注記担当】
"	専 門 員	中殿翠子
"	"	山田美弥子【調査員、遺構写真・土層実測、遺構整図作成】
"	"	西沢真弓
"	"	小野由美子
"	"	堀内健次
"	"	藤田隆之
"	"	小林まゆ佳
"	"	勝田智紀
"	"	宮川明美

整理調査員 青木善子〔遺物清書〕  
矢口栄子〔遺物実測・遺物図版・遺物観察表作成〕  
武藤信子〔遺構整図・遺構データー作成〕

調査從事者 青木東一・青木春美・池田賢二・加藤江里子・北沢元春・北島武彦・小林利夫・  
小林義光・塩野入仁一郎・曾根川好武・富田良章・町田登吾・宮川博・和田輝雄

調査関係者 消防局総務課施設係長 佐藤明（平成7年度）・島田一敏（平成8年度）

基準点測量・遺構測量業務委託 糸写真測図研究所

表土除去・搬出作業 糸山口建設

以上の方々の他に、地権者太田正彦・宮下伸一・宮原直樹・宮沢俊弘・太田澄夫・山本善久各氏には発掘調査の同意書をいただき、特に太田澄夫氏からは天幕設営地及び水道等の提供をいただいた。また、七二会支所長鈴木睦人・七二会公民館長峯村敬一・七二会地区区長会長北島貞一・瀬脇区長宮沢登・篠平区長山本住夫各氏からは調査從事者募集等でご協力をいただいた。記して感謝いたします。



II-5 発掘調査参加者（9月6日）

### III 調查

## 1 調査地と地形

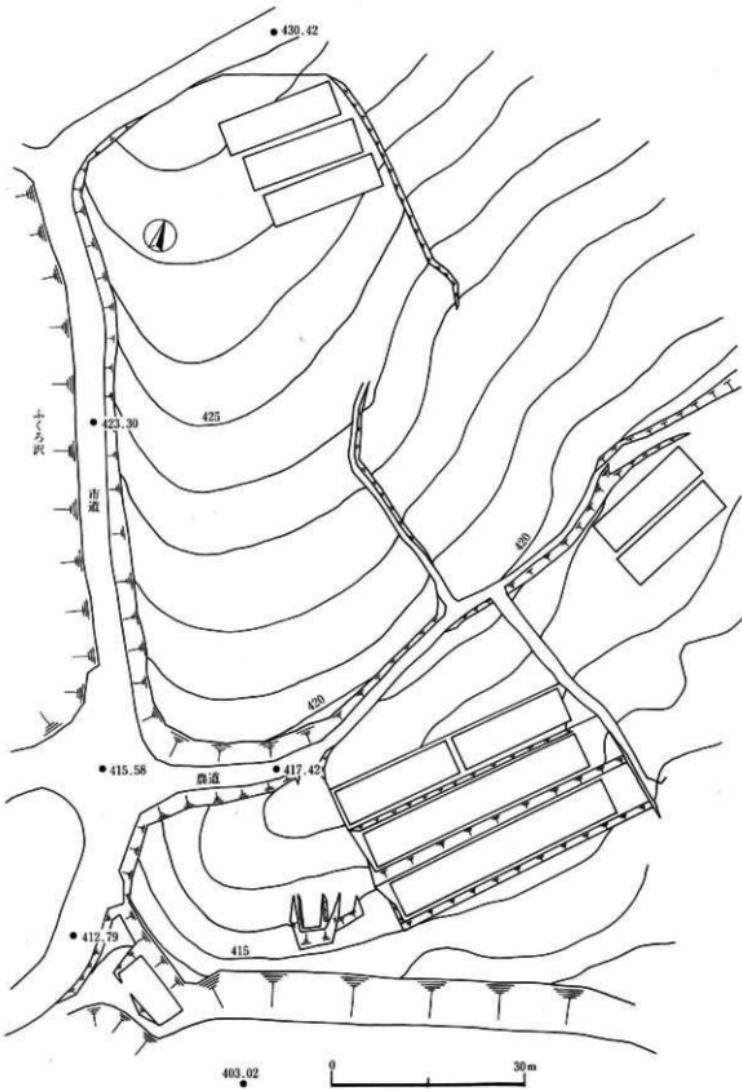


7図 調査地及び周辺地形図（1:10,000）

調査地付近は陣場平山から南方向に連なる低山地によって西側が区画される。知足院・小瀬場・苦桃・塩地等へと続く山塊である。七二会と東境する小田切地籍には庄兵衛沢があり、山塊の間は地すべり地形とそれを下刻する大小の沢が犀川にむけ流下し、所々に小規模な緩斜面と舌状台地地形を形成する。その中で柏尾南遺跡は犀川に最も接近する舌状台地の一つである。台地は段丘地形とも考えられており、東は清水沢により限られ、西はふくろ沢の浸食を受ける。清水沢との比高差は約10mで、ふくろ沢とは約6mを測る。ふくろ沢との崖錐中腹には狸尾を経由して市場へ通する市道が開削されている。この開削はそれ程古いものとは考えられず近年の事と推定する。それは調査地内に赤線が走っており、調査ではその遺構を確認している。ただ重要なことは調査地上部の地形を横断する道路のあり方は、この地点をもって地形の変換点になっていることである。この地点をもって遺跡の北側上限とする。更に地形図を観察すると地形を縦断する耕地へ入り込む道付近にも等高線の乱れが認められる。遺跡の東限を国道19号線に求めるが、調査地の下方はJAながの西部支所建設により既に削平され詳細は定かでない。こうした点を重視し、遺跡の規模は大きく見積って、南北約210m・東西120m前後になるものと思われる。狭義に見ると、調査地中央付近に農道が横断し、堀割り状あるいは土手化し、地形の変換点と考えられる。即ち標高430m付近を上限に農道上端までの斜角が5°であるのに対し、下方の角度は10°前後と倍近くの数値となり、調査地末端から国道までは11°以上の角度になるものと推定され、その平坦さから南北140m・東西70mの範囲に遺跡の主体があるものと推定される。ちなみに農道付近の標高420m地点と犀川河床面の比高差は約60m程度になる。国道から犀川へは直に近い崖錐となり、その比高差は約22mを測る。長野市防災基本図地形分類図(3図)では段丘の低位面に位置付けられ、同表層地質図(4図)では砂・礫による段丘堆植物であるという。



III-1 調査地遠景(南より)



8図 調査地地形図（約1：750）



III-2 調査地遠景（東より）

## 2 調査の方法

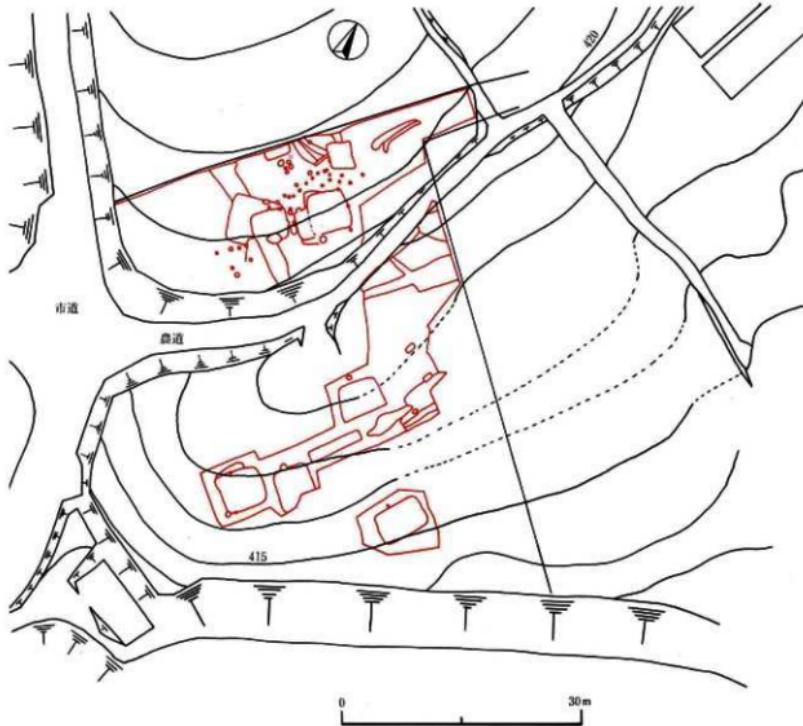
消防局二七二会分署庁舎建設にあたり事業地は全面削平造成の計画であった。そのため発掘調査にあたり全面の表土除去を計画したのであるが、農道を挟み上下の傾斜勾配の相違とダンプトラックの運行の難点等を考慮し、下段をトレンチ調査、上段を全面調査することにした。トレンチ調査は廃土除去、雨水処理上下方から等高線地形に沿って任意に1.5~2m幅で設置し、遺構の存在を確認した後、その周辺を拡張し遺構の露呈を試みた。また下段にあって農道付近は表土層は既に削平を受けたものと思われ10cm程度で黄褐色を呈する基盤層が露出する。調査地西側は南方向に13°の傾斜角を有し、雑草除去の際地山が露出しており、遺構等の落ち込みは確認されない。上段は緩斜面ではあるが平坦に近く、農道切り通し法面に残土処理が可能であったため全面発掘調査を実施した。

## 3 遺構の分布

調査地は標高422mから416mの範囲にある。農道を境に上段と下段の傾斜角に相違があることは前述した。分布調査の際には上段の調査地周辺はアスパラ畠で他は雑草が繁茂していたため全体を知り得ないが、アスパラ畠からは平安時代と推定される土器片が採集された。調査で確認された5・10号住居址付近である。下段においては農道下の微高地標高418~419m付近の調査地及び東側の農地踏み込み道にかけて同時代の环を主体とする土器細片の分布が見られた。上段は調査地及び標高423mの舌状台地頂部、下段は調査地に続く東側踏み込み道にかけた遺跡の主体部があるものと推定する。ただし「七二会村史」によれば、B地点遺跡の発見者酒井守助氏が古墳

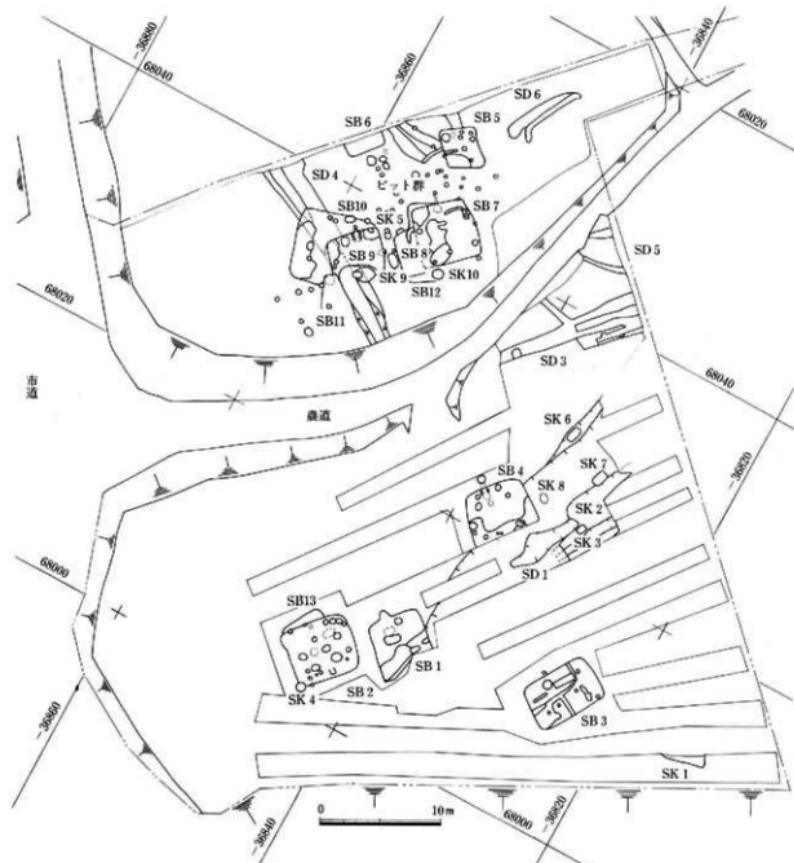
時代中期の土器器・高坏を発見した位置は杉の苗を植える際のこととのことで、今周囲を見渡すと、ふくろ沢と市道に挟まれた斜面に杉林が認められるのみである。さすれば急斜面からの出土である。村史では祭祀跡の可能性を指摘しているが、調査では南・西斜面及び上段の縁部からの遺構が確認されない。また上段の5号住居址の北は現地表面が平坦に近いのに対し、基盤層は緩傾斜するようになり、畠踏み込み道付近では深さ1m前後になる。6号溝址は畠作による深耕の可能性が強いため、基盤地形と考え合せると5号住居址から北方面には遺構の存在はないものと予想される。

縄文時代の遺構は確認されないが、黒曜石・チャートの剥片が数点出土しているだけである。また清水沢下流国道18号線付近の宅地造成時に採集された該期の遺物を実見する機会を得た。土器片は縄文中期の加曾利E式に比定されるもので、摩耗が著しく認められ、清水沢のローリングを受けたものと考えられる。数点の打製石斧にも摩耗が見られ調査地上方に遺跡の存在が予想される。弥生時代の遺構・遺物は確認されない。古墳時代の遺構は上段に住居址1軒(10号)、下段に3軒(1・2・4号)・土塙1基がある。下段の住居址群はなだらかな地形変換点縁部に位置する。平安時代の住居址は上段に7軒(5~12号)が検出されたが、5・6号を除き他は重複関係にある。11・12号住居址の南側は傾斜のため掘り込みの痕跡は残さない。また9・11号住居址の1部は溝址

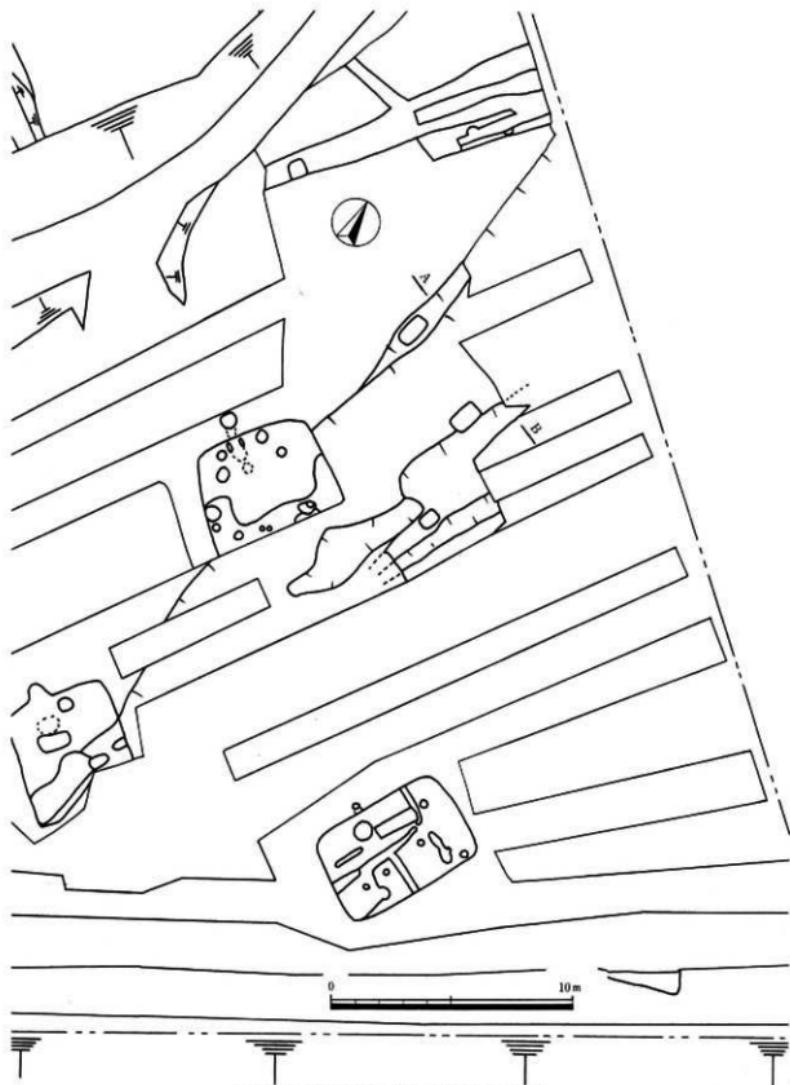


9図 地形及び遺構分布図 (1 : 600)

4（道路）により破壊を受ける。この他にピット群・土壤2基（9・10号）がある。下段では住居址2軒（3・13号）、溝址5条、土壤8基が発見されたが、3号住居址は明確なカマドを有しない。住居址の分布は上段で平安時代が、下段で古墳時代のものが多い。この他平安時代以前と推定する地すべりの痕跡と思われる地形の変換点が確認されている。地山が黄褐色砂礫質土に対し、これと暗褐色粘質土・黒色粘質土の落ち込みが確認された（11図）。落ち込み線は1・4号斜めに切り、ほぼ南北軸線上にある。土層断面図（12図）によると上部は表土下12cm程度で黄褐色砂礫質の基盤層に達し、20cm前後の段を構成した後、更に約5m下降したのちに再び段を形成する。1段目の5m付近の表土から72cmの深さになり、2段目の確認地点（約6m）での最深は1mを測る。1段目の落ち込み部に黒褐色粘質土小ブロック混りの暗黃褐色砂礫層になるほかは黒褐色粘質土を覆土とする。小規模地すべりによる成因が考えられ、地山基盤層はこの傾斜角度をもって国道18号線まで達していたとみられる。黒褐色



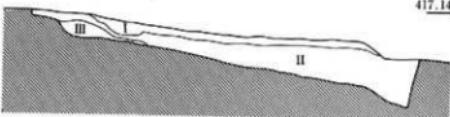
粘質土は水分を含むと粘着度が強く、乾燥するとブロック状態をなし非常に堅くなる。地元では金屎土（かなくそつち）と呼ばれ敬遠されている。この土層は平安時代の土師器・須恵器片を包含している。



11図 再地すべり状地形上限実測図 (1 : 200)

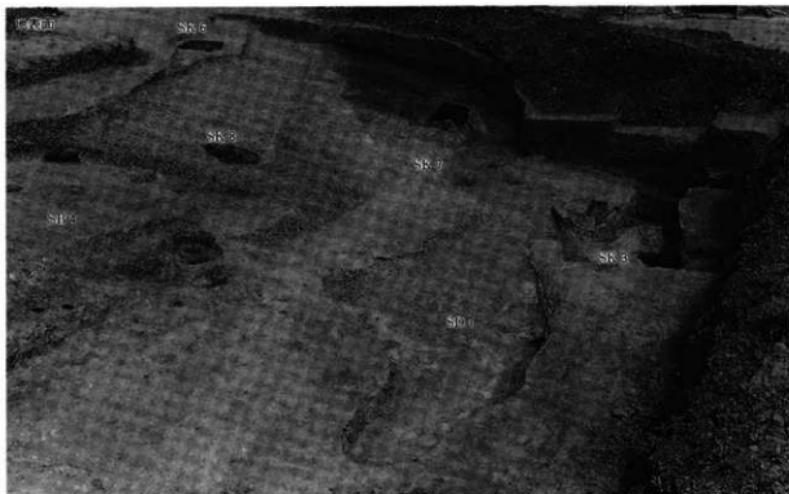
## 4 土層序

基盤層は砂岩・裾花凝灰岩の小塊を含む黄褐色粘質土で、地すべりによる再堆積土と推定される。村史や長野市防災地図にいう段丘地形による土砂の堆積であるものとは考えにくい。多くの遺構はこの基盤層を掘り込んでいる。基盤層上層は耕作土となり、10~20cm程の厚さしかない。耕作による削平と土砂の流失が著しかったものと考えられる。下段の平安時代に比定される土壙群は基盤層を掘り込んでいるものの確認面は再地すべり堆積土層の黒色粘質土である。覆土は古墳時代・平安時代とも大差なくほぼ同質の黒色粘質土であり、再地すべり土の土質と同質である。



I 單黃褐色粘質土  
II 黑色粘質土（遺物包含層）  
III I+II

12図 再地すべり地形土層図 (1:80)



III-3 再地すべり状地形及び遺構群

## 5 古墳時代の遺構と遺物

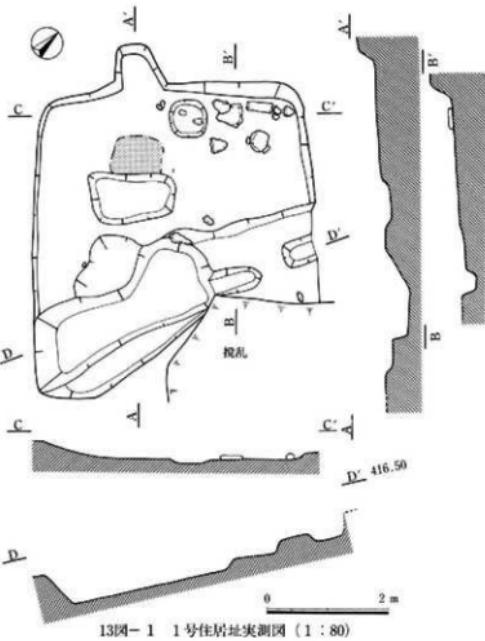
該期の遺構は住居址4軒・土壙3基が確認されているにすぎないが、下段の住居址群の立地は舌状台地丘陵先端、地形変換点にあたる点注意される。

### 1号住居址

遺構(13図-1、III-4)2号住居址の北側に位置する。東壁付近は再地すべり状地形により崩落し、溝状遺構を残す。また北東隅は深いゴミ穴により破壊される。形態は隅丸方形を呈するものと思われる。一辺4.5m前後の規模を推定し、主軸方向はN49°Wである。掘り込みは不明の西壁を除き各壁とも中央付近で31~36mで、床面は

地形に従って北西から東南に傾斜するが、堅緻で良好である。ただ南西隅の掘り込みは通常見られる直状にならず傾斜を有する。柱穴は認められなかった。カマドは西壁に構築ものと思われ焼土及び焼土塊を残す。煙道部は土壤状の遺構により破壊されたものと思われる。ただし焼土は西壁より1m程離れており、中央より南側にあることから地床炉の可能性もある。焼土の範囲は70~80cmで、中央の約35cmが焼土塊化していた。北西隅部にカマド構築用石材と思われる砂岩石が認められるが直列配置状態になっており別目的遺構とも考えられる。更にその東に偏平河原石が床面に接して据え置かれている。工作台の用途であろう。西壁下中央付近に径60cm・深さ8cmの円形掘り込み、焼土東に長軸1.4m・短軸0.8m・深さ12cmの土壙が認められる。再地すべり状地形の上部は溝形態になるが、下層の黒色粘土質土は更に南・東方向に傾斜を有しながら潜り込む。

遺物(13図-2)出土量は少ない。器種には土器器環・高环(1)・鉢(3)・小形甕(2)・瓶がある。高环は脚部のみの



13図-1 1号住居址実測図(1:80)



III-4 1号住居址

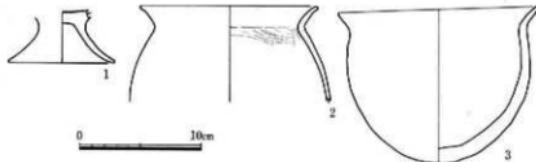
欠損品で、器高は低く、大きく外開する。坏部は楕形になるものと思われ、内面は黒色処理が施される。鉢は坏形を呈し丸底になる。

器面は荒れており、口縁屈曲部に

ヨコハケ状の痕跡を残す他は不明

である。甕は体部上半部から口縁

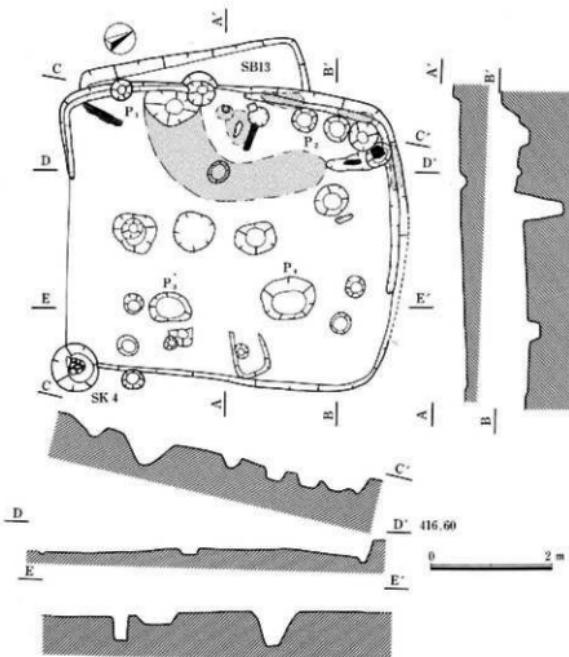
部にかけての器形が推定され、頭部がくの字形に屈曲し、口縁部は更に外開する。頭部内面にハケナデ調整痕、口縁部にヨコナデ痕を残す。



13図-2 1号住居址出土土器実測図 (1:4)

## 2号住居址

造構(14図、III-5・6) 調査地下段の南・東の地形変換点に位置し、該期の4号土壙、平安時代の13号住居址と重複関係にある。形態は南西隅が若干張出しているが隅丸方形を呈する。北壁は丸味を帯び、中央部はトレンチ調査で破壊され、南壁は斜面にあり残存しない。主軸4.0m・南北4.5mの規模で、主軸方向はN55°Wを指す。掘り込みは西壁が最も深く40cm・東壁が8cmである。床面は堅緻であるが地形傾斜方向に傾く。主柱穴は4

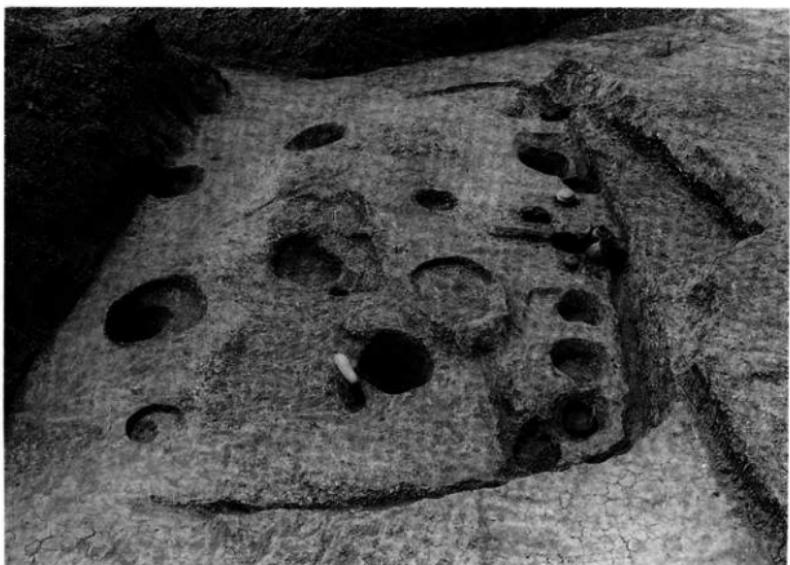


14図 2号住居址実測図 (1:80)

個方形配列を推定する。カマドは西壁中央に構築されるが、調査時では砂岩の支脚石と焼土・焼土塊が残存しているにすぎない。西壁及び北・南壁の一部に周溝が認められ、幅8~14cm・深さ4~9cmを測る。住居址は火災



III-5 2号・13号住居址（東より）



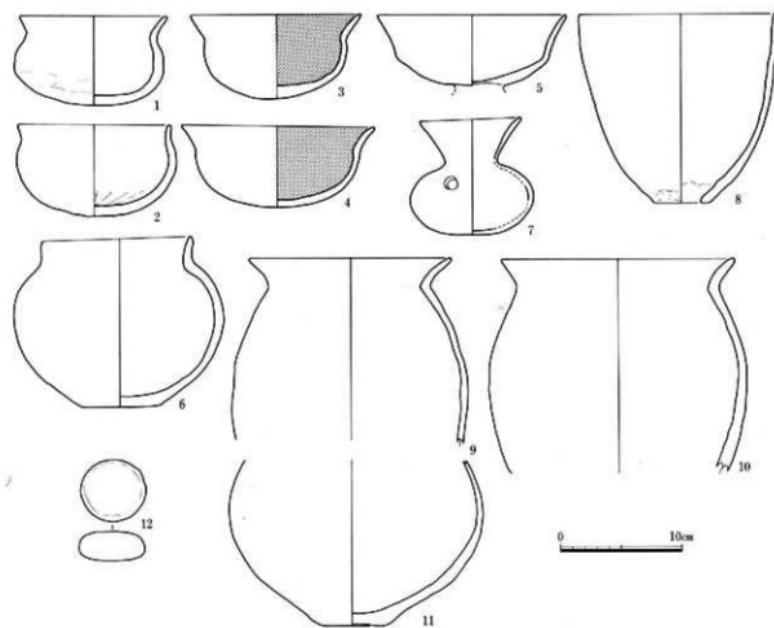
III-6 2号・13号住居址（北より）

を受けたものと思われ、西・北壁は焼土化しており、住居址内各所に焼土及び炭化材が認められた。

遺物（15図） 出土量は多いが、そのほとんどが破片出土である。図示した土器のほとんどが西壁直下及びカマド周辺からのものである。器種には土師器環（1～4）、高环（5）、短頸壺（6）、甌（7）、甌（8）、甌（9～11）がある。この他に円盤状土製品が出土している。环は3形態あり、体部が球形で口縁部が外開するもの（1）と直立するもの（2）、体部が外開気味になり口縁部が大きく外開するもの（3・4）がある。底部は、共に丸底状になる。3・4の内面は黒色處



III-7 2号住居址カマド・土器出土状態

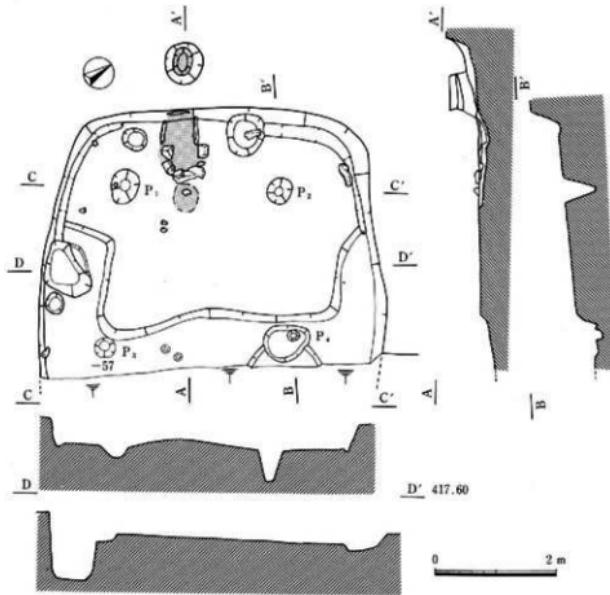


15図 2号住居址出土遺物実測図（1：4）

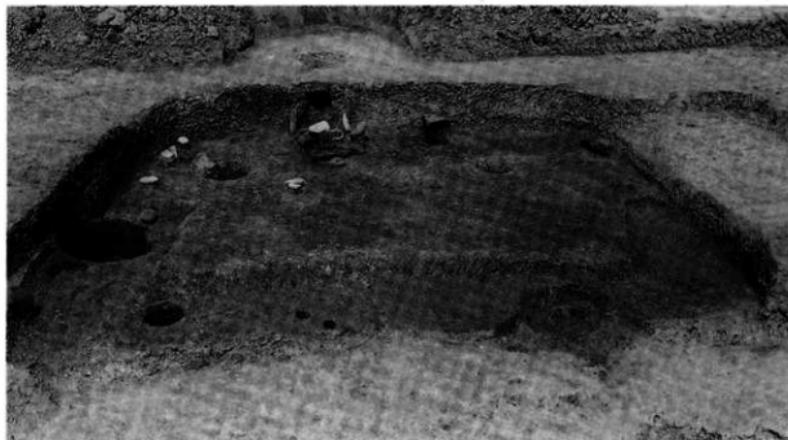
理される。調整は器面が荒れており定かではないがヘラミガキを基調とする。1の底部外面はヘラケズリ痕が、2の内面にはヘラ先痕が観察される。高环は脚部を欠く。破片中に筒形の脚部が見られる。短頸壺は短く直立する口縁部になり、球形体部を特色とする。底はラッパ状に外開する口縁部と偏平球形体部からなり、体部上半に1孔が穿たれる。瓶は砲弾形を呈する小型のものである。底部外面にはヘラケズリ痕が残る。甕には長胴化するもの（9・10）と球形胴のもの（11）がある。頭部はくの字形になり、口縁部は外反する。器面は荒れており調整の観察は困難であるが、ハケ及びヘラによるものと推定される。円盤状土製品の用途は不明である。尚、甕は甕00とセットとして出土している。

#### 4号住居址

遺構（16・17図、III—8・9） 調査地下段の中央付近に位置し、再地すべり状地形上に東側半分程かかる。東壁はこのため高さを減じ、調査時では落ち込み状態であった。形態は胴張りの隅丸方形を呈するものと考えられる。主軸方向はN57°Wを指し、主柱穴の位置から推定すると5m前後の規模になるものと思われる。南北間は5.6mを測り、2号住居址同様等高線に沿って横長になる。掘り込みは西壁が最も深く47cmになる。床面は堅緻であるが地形に応じて東・北方向に傾斜を有する。主柱穴は4個方形配列であるが、径20~35cm・深さ19~57cmと不揃いである。カマドは西壁中央より南に偏して構築される。石芯兩袖形のカマドである。壁直下に長軸偏平石を埋め込み、各2個の自然石を立てて両袖とし、カマド前面の高架石は床面にずり落ちていた。火床の規模は長軸90cm・内法50cmを測る。煙道は西壁を径30cm程で刳貫き、壁外40cm延びたところで径62cmの煙出しピットをもって終結



16図 4号住居址実測図 (1:80)



III-8 4号住居址

する。周溝状造構は西・北・南各壁直下に見られ、幅9~11cm・深さ10cm前後のものである。また南壁中央直下に長軸1m・短軸0.65m・床面からの深さ75cm呈の不整隅丸三角形を呈する土壌がある。周溝の終末に位置することから排水の用をなしたものであろうか。

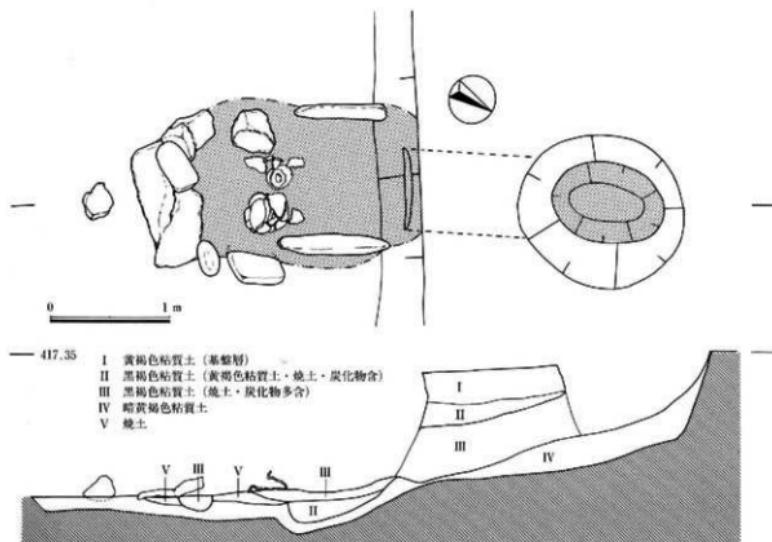
遺物（18件） 出土量は少ない。器種には土師器環（1~4）・高环（5）・小形甕（6）・甕（7~9）と砾石がある。1の环は楕形で体部から口縁部が直線的に外開し、底部は丸味を帯びる。口縁部に一条の凹線がめぐる。2は球形胴から口縁部が屈曲外反する器形になり、3は体部からの屈曲部は丸味を持ち、4はくの字形に屈曲したのち口縁部は更に外開する。

共に丸底である。器面は荒れており調整

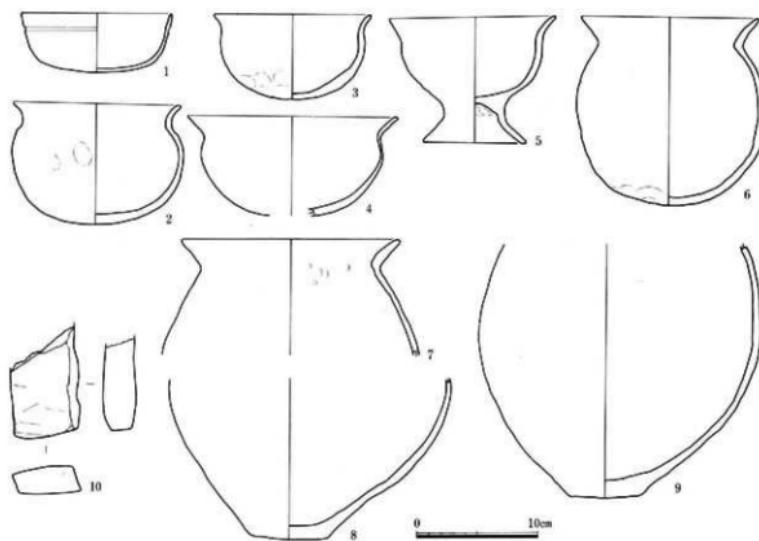


III-9 4号住居址カマド

はさだかでないがヘラによるものと思われる。高环は低脚に3形態の环が付着する。外面の調整は不明であるが内面はヘラミガキが施される。図示したもの他に筒状を呈する脚が4個体出土している。小形甕は大形のものより口径に対する器高の比率が低くすんぐりした感を受ける。頭部は大形甕と同様くの字形に屈曲するが、体部、底部ともに丸味を帯びる。底部外面はヘラケズリが施される。甕（7~9）の体部は長胴化し、最大径は体部下半分にある。8は不整円形の体部になるが基本形は9と同様であろう。口縁部はヨコナデ調整され、頭部内面にヘ



17図 4号住居址カマド実測図 (1:20)



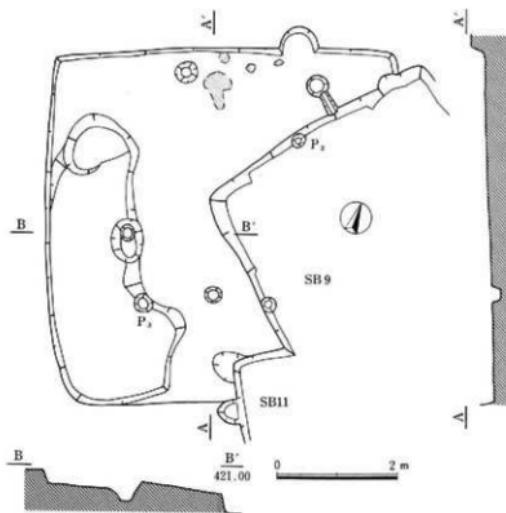
18図 4号住居址出土遺物実測図 (1:4, 10は1:2)

ラ工具の痕跡を残す。10は凝灰岩製の手持砥石で四面が使用されている。尚、1号溝址から該期の遺物が出土している(11図)。再地すべりの際4号住居址の東壁付近の崩落とともに流出したものと考えられる。器種には壺(2)・瓶(3)・甕(4)がある。壺は球形胴を呈し、口縁部は頭部からくの字形に屈曲するものと推定される。体部内面に成形痕・指頭圧痕を残す。外面はヘラミガキ調整であろう。瓶は底部から口縁部まで直線的に外開し、断面三角形状を呈する。甕は体部下半の破片であるが、球形胴になるものと考えられる。底部は肥厚し、外面の中央部は凹む。

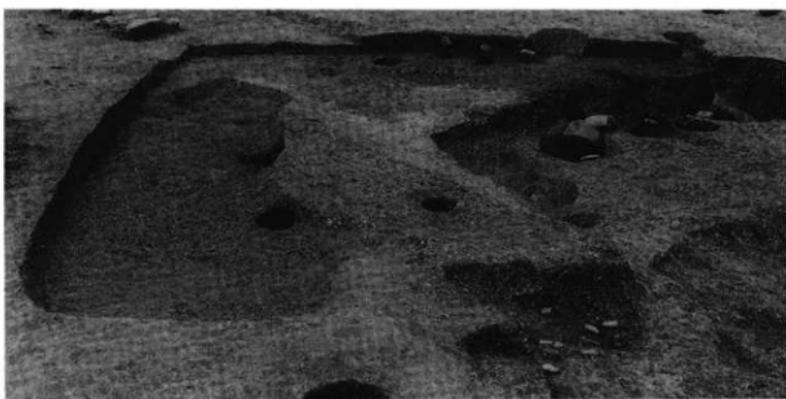
#### 10号住居址

遺構(19図、III-10) 調査地上段の南端に位置し、平安時代の9号・11号住居址と重複関係にある。形態は方形を呈するが、東壁は斜面下方にあたるため残存しない。主軸方向はN23°Wを指し、主軸5.8m・東西軸5.7mを測る。掘り込みは北壁が最も深く20cmである。床面は軟弱で、地形傾斜方向に下降する。主柱穴は2個のみ確認された。径30cm・深さ14~16cmを測る。カマドは北壁中央に構築されるが、調査時では焼土のみ残存していたにすぎない。煙道の形跡は認められない。西壁に沿って幅1.4~2.1m・深さ9~22cmの落ち込みが見られた。

遺物(20図) 出土量は少ない。図示したものの多くはカマド周辺からの

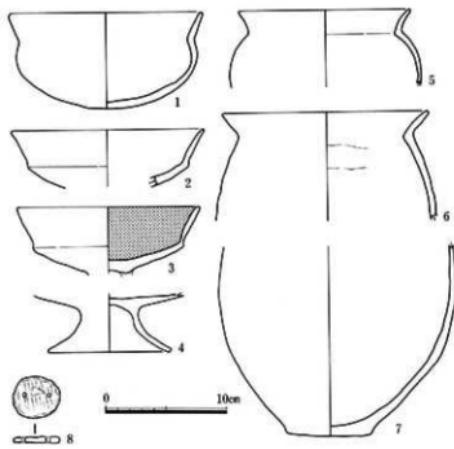


19図 10号住居址実測図 (1:80)



III-10 10号住居址

出土である。器種には土師器環(1)・高环(2～4)・小形甕(5)・甕(6・7)がある。石製品として滑石製有孔円板がある。环は体部が偏平球形を呈し、口縁部はくの字形に外開する器形になる。2・3の高环は体部と口縁部の接合面に鈍い稜を形成する。共に脚部を欠損しているが筒状の脚になるものと推定される。4は环部を欠損するが盤状の器形を予想する。脚は低く、大きく外開する。3の环部内面は黒色処理が施され、ヘラミガキ調整である。甕類は4号住居址のものと同様に、小形のものは球形胴、大形のものは長胴化する。調整はヘラナデ・ハケナデにより仕上げられる。有孔円板は1対の穴が穿たれている。鏡の模造品と考えられている。

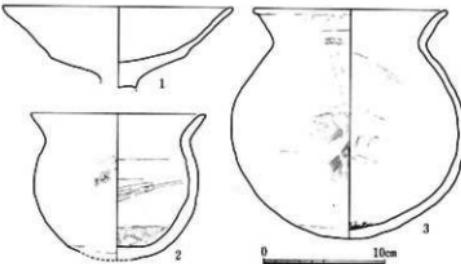


20図 10号住居址出土遺物実測図 (1:4, 8は1:2)

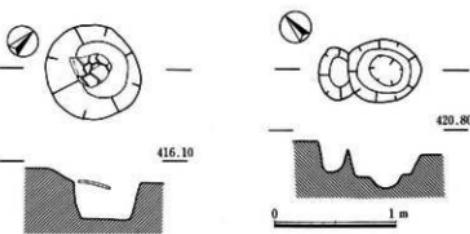
## 2号土壤

遺構 (11図、III-3) 3号・7号土壤の中間に位置し、地すべり状地形の2段目の南端にある。遺構の規模は覆土が同質であるため土層からは窺えない。南西隅は20cm程の掘り込みになる。底面は平坦である。

遺物 (21図) 出土量は少ないが、南西隅から集中して出土した。器種には土師器高环(1)・鉢(2)・小形甕(3)がある。高环は环部のみ残存し、体部から口縁部の接合部に鈍い稜を形成するものの口縁部は直線的に外開する。脚は筒状を呈する器形と推定する。鉢は环と小形甕の中間に位置する器形で、口縁部は丸味を有して外開し、体部は球形を呈する。体部内面に成形痕を残す。調整はハケ・ヘラナデによる。小形甕は壺形に近く、最大径は体部下半にある。頸部はくの字形に屈開する。体部外面にハケ調整痕、内面にヘラナデ調整痕を残す。



21図 2号土壤出土土器実測図 (1:4)



22図 4号(左)・5号(右) 土壌実測図 (1:20)

## 4号土壤

遺構 (22図、III-11) 調査地下段の2号住居址南東隅部と重複関係にある。形態は円形を呈し、径0.75m・

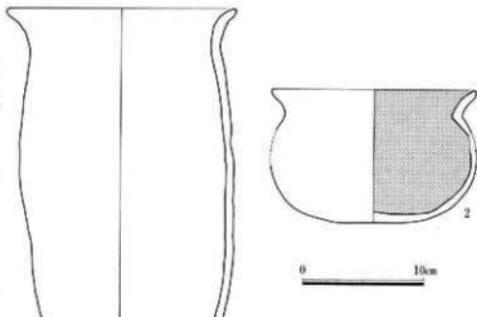
深さ40cmの規模である。

遺物（23図） 土師器壺が1個体出土したにすぎない。口縁部は体部から丸味を有して外開し、明瞭な頸部を形成しない。体部は著しく長胴化する。体部外面はハケナデにより全面調整が施される。3号住居址より後出のものである。

#### 5号土壤

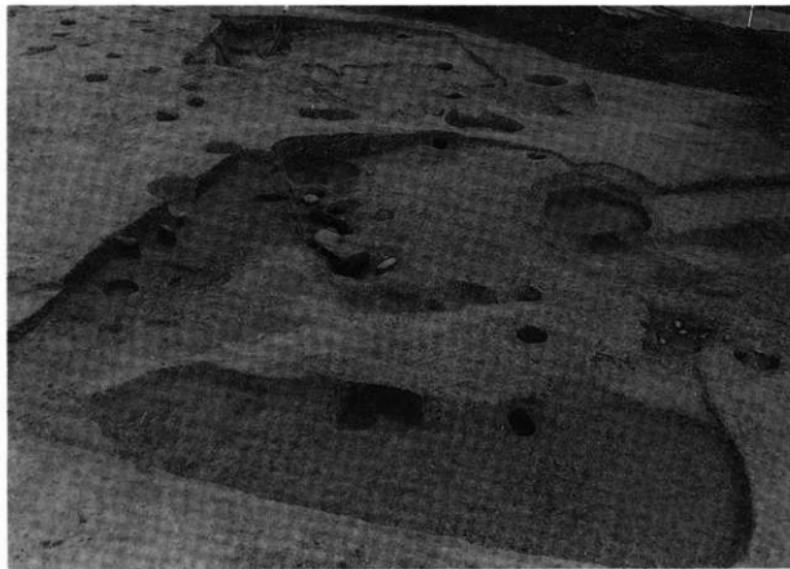
遺構（22図） 調査地上段に位置し、平安時代の8号・9号住居址の間にある。形態はピット状をなし、長軸0.6m・短軸0.5m・深さ22cmの規模になる。

遺物（23図） 土師器壺が1個体出土しているにすぎない。器形は偏平球形胴で、口縁部はくの字形に屈開外反する。内面は黒色処理が施される。



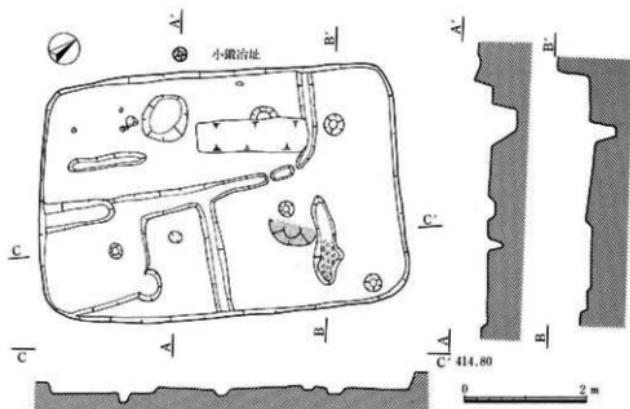
23図 4号（1）、5号（2）土壇出土土器実測図（1：4）

## 6 平安時代の遺構と遺物

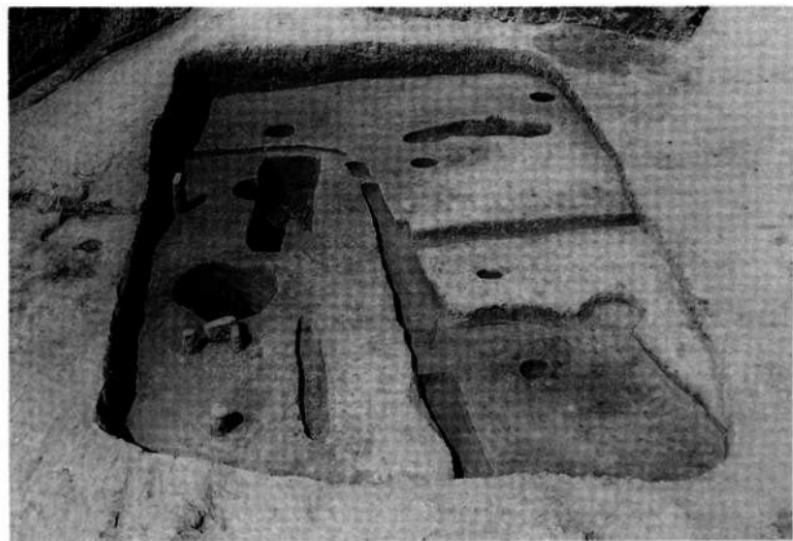


III-11 調査地上段遺構群

住居址9軒・土塙7基・溝址4条・ピット群・小鐵冶址1基の遺構を検出した。上段の遺構群は同時代において重複関係にあるものが多い。また下段における火熱を受けた土塙群は再地すべり地形堆積土を掘り込んでいる点注目される。



24図 3号住居址実測図 (1:80)



III-12 3号住居址

### 3号住居址

遺構 (24図、III-12) 調査地内の最も下段に位置し、上方の5号住居址西壁と本遺構検出面の比高差は3m以上ある。形態は隅丸長方形を呈する。南北4.0m・東西5.95mの規模で、地形斜面に対して横長になる。西壁の深さは54cmであるに対し、東壁は14cmである。床面は南北が平坦で、東西は東傾斜し、軟弱である。柱穴は6個確認されているが小屋組配列にはならない。住居址内は土壌状遺構および溝が掘り込まれており、溝は間仕切りの用途であろうか。カマドの存在は確認されない。北東隅付近に炭火物が多量に入り込んだ溝状遺構があり、その南に接して0.9mの範囲に焼土が認められ、その中央は10cmの深さで径30cm

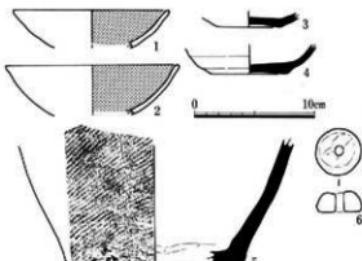
程が還元焼土塊化している。小鍛冶遺構と思われる。本来の住居施設よりも作業施設と考えられる。

遺物 (25図) 出土量は多くなく、すべて破片出土である。器種には土師器環(1・2)・甕、須恵器環(3・4)・甕・四耳壺(5)、灰釉陶器碗がある。石製品として滑石製鍤車が出土している。この他に羽口片、鉄滓がある。土師器環の内面は黒色処理が施される。調整はヘラによる。須恵器環は底部付近の破片で、糸切り痕を残す。四耳壺も体部下半分の破片で、外面全体にタタキメを残す。鍤車は断面台形状を呈し、石質からも古墳時代に比定されるものであろうか。

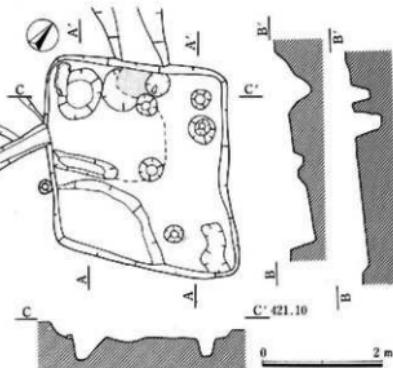
### 5号住居址

遺構 (26図、III-13) 調査地上段に位置し、2号溝址と重複関係にある他の単独遺構である。北壁の溝は烟道の境界溝と考えられる。また北端に位置し地形傾斜が南から北に変換する位置にある。形態は隅丸方形ではあるが、南東隅部が張り出しひしやけた形になる。主軸方向はN44°Wを指す。主軸中央3.3m・東西2.95mの規模で、掘り込みは北壁12cm・南壁11cm・東壁12cm・西壁14cmを測る。床面は主軸方向への傾斜が目立つ。北西部に堅緻な床面がある他の軟弱である。カマドは西壁中央に構築されるが焼土のみ残存し、北西隅付近に構築石材が散在する。煙道は認められない。カマド左に径0.9m・深さ38cmの貯蔵穴と考えられる円形土壙がある。南西隅部に落ち込みが見られる。柱穴は5個確認されるが方形配列にならない。ピット群に属する可能性がある。

遺物 (27図) 出土量は少なく、甕1個体を除く他の破片出土である。器種には土師器環(1~3)・甕(4・5)、須恵器環がある。環の内面は黒色処理が施され、底部外側に糸切り痕を残す。4の甕は丸底になり、5は平底で上げ底になる。体部は直線的になり、口縁部は丸味をもって外反する。体部外側の調整はヘラケズリにより、内面はヘラナデで仕上げる。



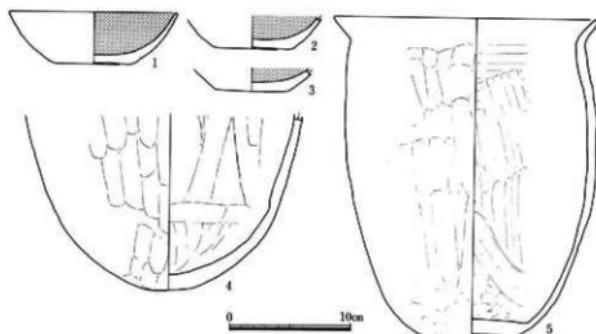
25図 3号住居址出土遺物実測図 (1:4)



26図 5号住居址実測図 (1:80)



III-13 5号住居址

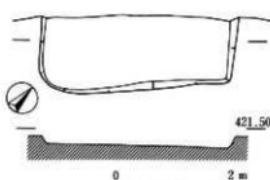


27図 5号住居址出土土器実測図 (1:4)

#### 6号住居址

遺構 (28図) 調査地上段の最西端に位置する。単独検出遺構であるが西半分は調査区域外へ延びる。地表から検出面まで10数cmしかない。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、南北3.2mの小形の住居址である。掘り込みも浅く南壁20cm・北壁13cmにすぎない。床面は軟弱で北方に向に傾斜する。調査範囲内では付属施設は確認されない。

遺物 土器器坏・甕片が数点出土しているにすぎず、図上復元可能な遺物はない。

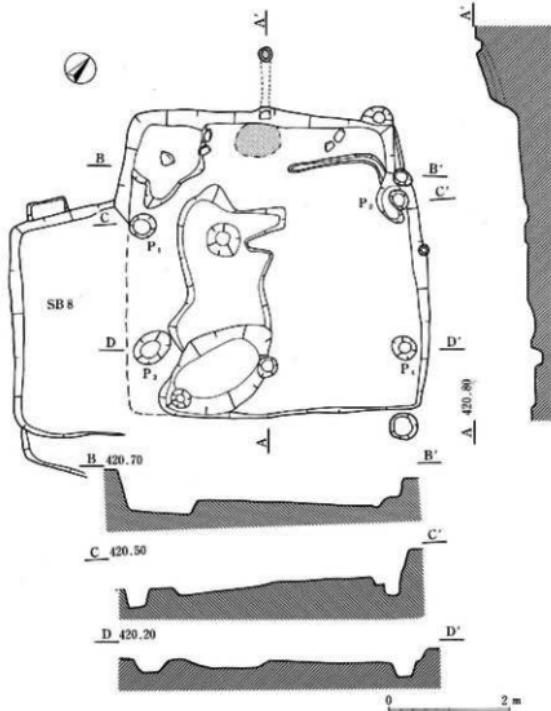


28図 6号住居址実測図 (1:80)

7号住居址

遺構（29図、III-14・15） 調査地上段の中央に位置し、8号住居址の南半を切り込んでいる。形態は方形を呈し、北壁は丸味を帯びる。主軸方向はN43°Wを指す。主軸5.05m・南北4.65mの規模で、西壁45cm・東壁12cmの掘り込みになる。床面は堅緻であるが複雑に傾斜する。主柱穴は4個方形配列になる。カマドは西壁中央に構築されるが、既に破壊を受け焼土・煙道が残存するのみである。煙出しピットは壁外に0.9m程伸びた後径24cmの規模である。煙道は削ぎきである。南西隅に深さ13cm程の不整形の貯蔵穴と推定される土壙が、中央南側に3~5cmの浅い落ち込みが見られる。

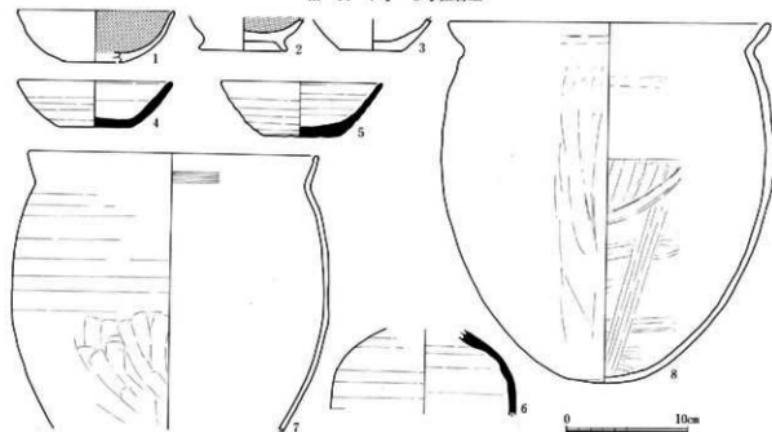
遺物（30図） 出土量は他の住居址に比較して多いがそのほとんどが破片出土である。器種には土師器環(1)・椀(2)・小形甕(3)・甕(7・8)・須恵器环(4・5)・瓶(6)・甕・灰釉陶器椀・瓶がある。土師器环・椀とともにロクロにより成形され、内面はヘラナデが施され黒色処理される。小形甕の器形は底部付近しか知り得ない。ロクロナデで仕上げる。甕の体部は砲弾形を呈し、底部も丸底になる。頸部は緩く屈曲するが、外反した口縁部は内湾する特色がある。7の体部上半にはロクロナデ痕が残り、下半部はヘラケズリが施される。内面はナデ調整である。8の外面はヘラケズリ様のナデ調整で、内面の上半はヨコハケナデ、下半はヘラナデにより仕上げる。須



29図 7号住居址実測図 (1:80)



III-14 7号・8号住居址



30図 7号住居址出土土器実測図 (1:4)

器はロクロ成形でロクロメを残す。底部外面には糸切り痕がある。6は長頸瓶と推定する。出土破片中には残存部は認められない。ロクロ成形である。この他に亀の子状の鉄滓が1個出土している。

#### 8号住居址

遺構 (32図、III-14・15) 調査地上段の中央に位置し、7号・12号住居址と重複関係にあり、7号よりも古く、12号より新しい。7号住居址によりカマド・煙道が半蔵されていることから北半分が重複のために破壊され



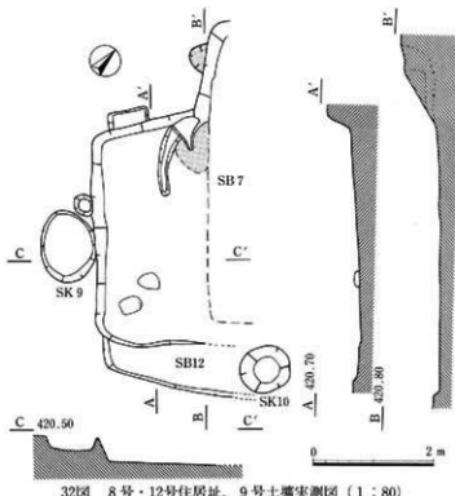
31図 8号住居址出土土器

実測図 (1 : 4)

たことになる。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、一辺3.9mの規模になる。主軸方向はN42°Wを指し、西壁の掘り込みは40cm・南壁末端が6cmを測る。床面は軟弱であるが平坦で、東・北へ若干傾斜する。カマドは西壁中央に構築され火床のみ残存する。煙道は壁外60cm程延び径45cmの煙出しピットをもって終結する。南東隅に2個の平腹河原石が据え置かれていた。工作台としての使用が考えられる。

遺物(31図) 出土量は少なく、それも破片出土である。器種には土師器壺・小形甕(1)・

甕、須恵器蓋がある。小形甕はロクロにより仕上げられる。体部は直線的で口縁部は内湾気味に立ち上がる。



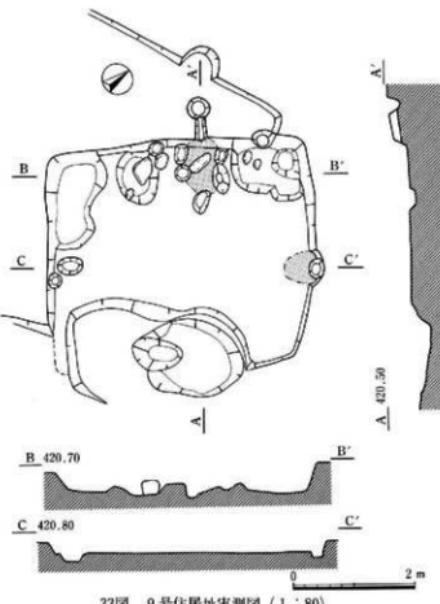
32図 8号・12号住居址、9号土壤実測図 (1 : 80)



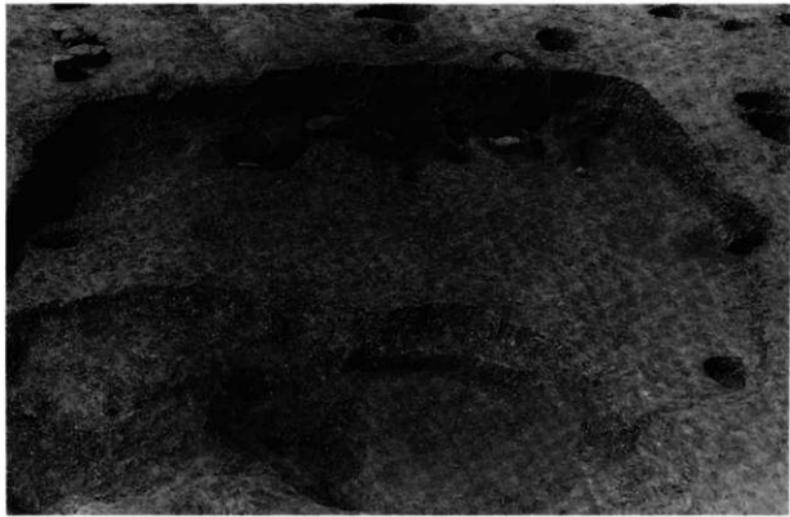
III-15 8号・7号・12号住居址

### 9号住居址

遺構（33図、III-16） 調査地上段の住居址群の一つで、古墳時代の10号住居址、該期の11号住居址と重複関係にあり、11号より新しい。東壁は土壤状遺構及び傾斜面に位置するため削り取られる。形態は隅丸方形を呈し、主軸5.8m・南北4.4mの規模になる。主軸方向はN49°Wを指す。掘り込みは西壁27cm・東壁3cmであるが、床面は平坦で堅硬である。カマドは西壁と北壁中央に構築される。北壁のものは若干張り出してつくられ、小ピットと焼土のみ確認された。西壁のものは袖部の石芯構築石材が抜き取られ、その痕跡がピット状となって残存する。周囲に石材が散在する。焼土の範囲は主軸1.2m・幅0.5mである。煙道は壁外に34cm伸びた後、径36cmの煙出しピットで終結する。西壁両隅には不整形な浅い落ち込みが認められ貯蔵穴と推定する。東壁付近に長軸3.0m・短軸1.8m程の土壤状落ち込みがある。内部の北に偏して長軸1.8m・短軸1.2mの卵形を呈する土壤がある。東壁外には



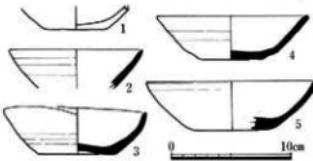
33図 9号住居址実測図（1:80）



III-16 9号住居址

み出していることから別遺構とも考えられる。ここからの出土遺物は少量でそれも小破片である。

遺物(34図) 出土量は少ない。器種には土師器壺(1)・小形甕・甕、須恵器壺(2~5)・甕がある。壺類はロクロ成形で、底部外面に糸切り痕を残す。土師器壺には内面が黒色処理が施されたものもある。

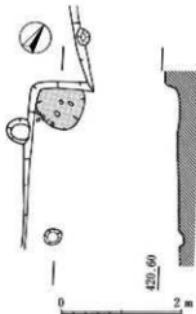


33図 9号住居址出土土器実測図(1:4)

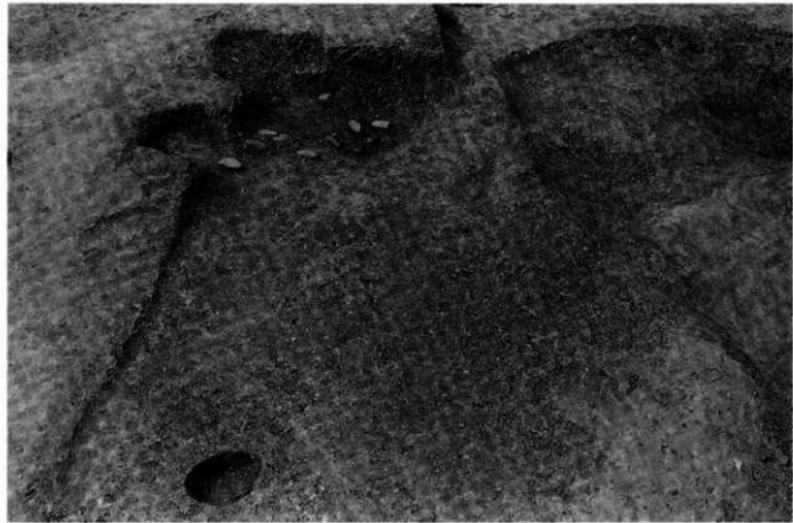
#### 11号住居址

遺構(34図、III-17) 調査地上段に位置し、古墳時代の10号住居址、該期の9号住居址と重複する。東壁は斜面にあるため残存せず、近・現代の4号溝址(道路)の切通しにより北方は破壊される。調査では西・南壁の一部を確認したにすぎない。形態は隅丸方形と推定するが、規模は不明である。西壁軸はN33°Wになる。掘り込みは西壁で18cmを測る。カマドの位置等は不明であるが、南西隅部から焼土と炭化物を含む数cmの落ち込みがある。周辺からは細長の自然石小石が散在する。柱穴が1個確認されるだけで他の施設はない。

遺物 出土量は数点にすぎず、器形の確認されるものは内面黒色処理された土師器壺のみである。



34図 11号住居址実測図(1:80)



III-17 11号住居址

### 12号住居址

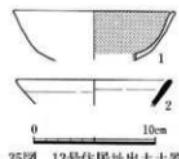
遺構（32図） 8号住居址の東に位置し、南東隅部を検出したにすぎず、形態・規模等不明である。東壁の掘り込みは10cmで、8号住居址との床面差は5cmである。

遺物 出土遺物はない。

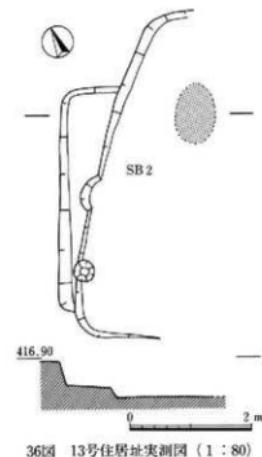
### 13号住居址

遺構（36図、III-5・6） 調査地下段に位置し、古墳時代の2号住居址と重複関係にある。調査では2号住居址を先行したため西壁とカマド火床を確認したにすぎない。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、南北3.65mを測る。西壁の掘り込みは31cmになり、その方向はN68°Eである。カマドは北壁に構築され、長軸1.0m・短軸0.65mの楕円形の火床を残す。

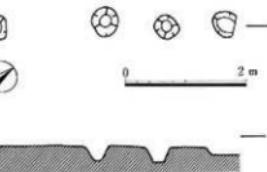
遺物（35図） 出土量は少なく、それも破片出土である。器種には土師器環(1)・小形甕・甕、須恵器環・甕、灰陶陶器模がある。环はロクロによって仕上げられ、1の内面はヘラ調整である。



35図 13号住居址出土土器実測図 (1:4)



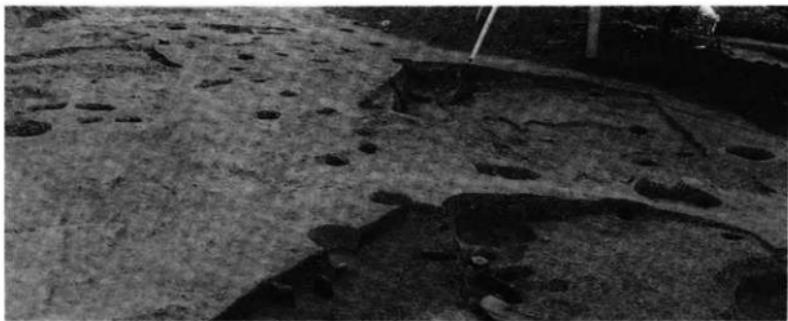
36図 13号住居址実測図 (1:80)



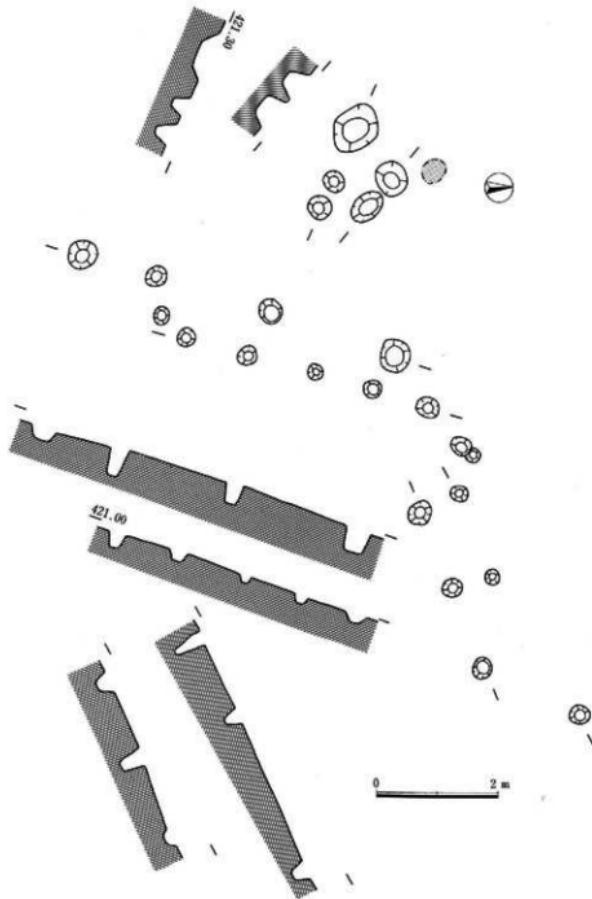
37図 ピット群(2)実測図 (1:80)

### ピット群

遺構（37・38図、III-18） 調査地上段の中央付近に散在する。近隣の住居址群と埋没土が同質であるため、前後関係・住居址覆土中の存在等不明である。ピットは柱穴と考えられるが小屋組配列になるものは見あたらぬ。ただし、7号住居址西(1)、10号住居址東(2)に展開するピットの中には柱列をなすものがあり、建物址というより柵址と考えた方が良いかも知れない。



III-18 ピット群(1)



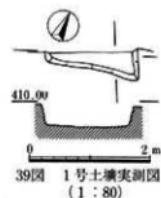
38図 ピット群(1)実測図 (1 : 80)

遺物 土師器壺・甕、須恵器壺片等が出土したが、図上復元できるものはない。

#### I号土壙

遺構 (39図) 調査地の東端に位置する。形態は不整方形を呈するものと思われる。  
東西1.6m・深さ68cmの規模になる。

遺物 土師器壺・甕片が出土しているにすぎない。



39図 1号土壙実測図 (1 : 80)

### 3号土壙

遺構（40図、III-19） 調査地下段、再地すべり状地形下方に位置する。黒色粘質土層を掘り込み、覆土は下層から黑色炭化物多含粘質土、上層が黒色粘質土になる。遺構周縁の焼土帯がなければ検出されなかつかも知れない。即ち土壤外4cm程が焼土塊化しており、外縁は白褐色焼土塊化する。相当強い火熱を受けている。底面は焼土化するのみである。形態は不整橢円形を呈し、長軸0.94m・短軸最大幅0.7m・南壁からの深さ25cm・北壁からの深さ16cmを測る。掘り込みは南壁が傾斜を有するのに対し、北壁は直に近い。底面は舟底状を呈する。長軸方向はN 7°Eを指す。覆土中より土師器片が数点出土しているにすぎない。

### 6号土壙

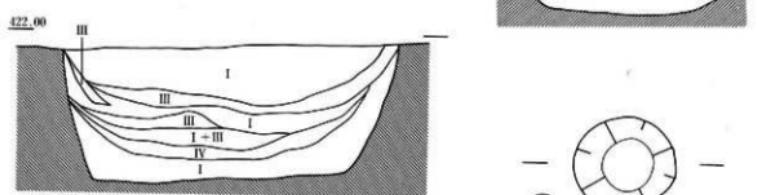
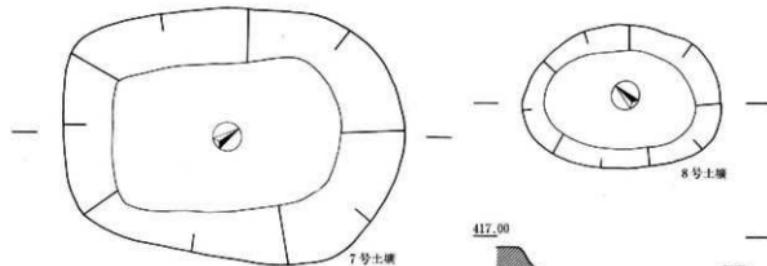
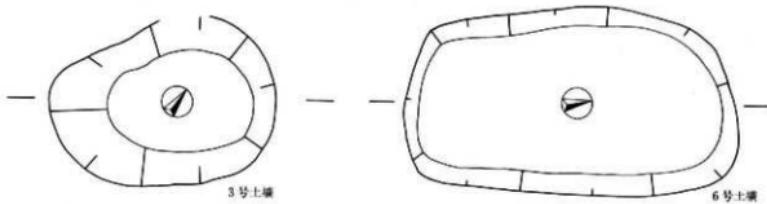
遺構（40図、III-20） 調査地下段の再地すべり状地形の上端に位置する。掘り込み面・覆土及び遺構外周縁の状況は3号土壙と同様である。形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.38m・短軸0.76m・長軸両壁の深さ14cm・最深部23cmを測る。長軸方向はN 7°Eを指す。掘り込みは直に近く、床面は平坦であるが、南側で若干凹む。覆土中に2個の拳大の自然礫がある他遺物の出土はない。

### 7号土壙

遺構（40図、III-21） 調査地下段の再地すべり地2段目の縁部に位置する。掘り込み面・遺構の外周縁の状況は3号土壙と同様である。覆土は黒色粘質土と炭化物多含黄褐色粘質土の互層をなし、下から2層目は11cm程の炭化物土層になり、底面は炭化物土が圧縮した状態で確認された。形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.38m・短軸最大幅1.04m・深さ55cmの規模になる。主軸方向はN 25°Eを指す。掘り込みは傾斜を有し、底面は平坦である。出土遺物は確認されない。



III-19 3号土壙



- I 黑色粘質土
  - II 黑色粘質土 (炭化物多食)
  - III 黄褐色粘質土 (炭化物含)
  - IV 炭化物 I
- ① 白褐色土
  - ② 暗赤褐色燒土

0 1 m

40図 平安時代土壤実測図 (1 : 20)

### 8号土壙

遺構（40図） 調査地下段の再地すべり状地形内の4号住居址の北に位置する。形態は橢円形を呈し、長軸0.86m・短軸0.6m・北壁の深さ28cmを測る。掘り込みは傾斜を有し、底面も丸味を帯びる。長軸方向はN45°Wを指す。覆土は黒色粘質土であり、底面に炭化物を残すが焼土化しない。ただし検出面上方の遺構外周縁に焼土が認められた。出土遺物は確認されない。



III-20 6号土壙

### 9号土壙

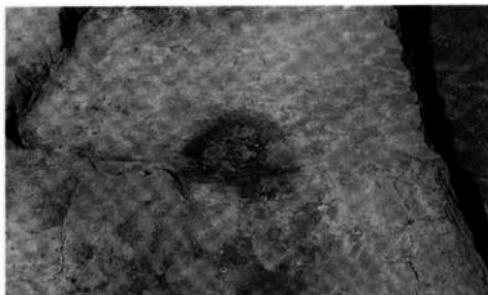
遺構（32図） 調査地の上段に位置し、8号と9号住居址の間に位置する。形態は橢円形を呈し、長軸1.2m・短軸0.9m・深さ17cmを測る。主軸方向はN42°Wを指す。遺物 出土遺物は土師器环・甕、須恵器片が数点あるにすぎない。



III-21 7号土壙

### 10号土壙

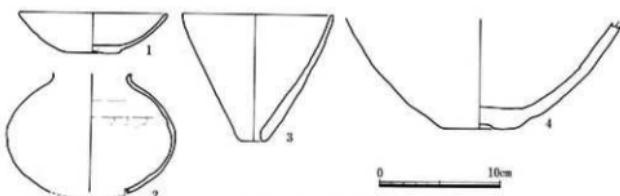
遺構（40図） 調査地の上段に位置し、7号住居址東側斜面にある。形態は円形を呈し、径0.88m・深さ53cmの規模である。遺物の出土はない。



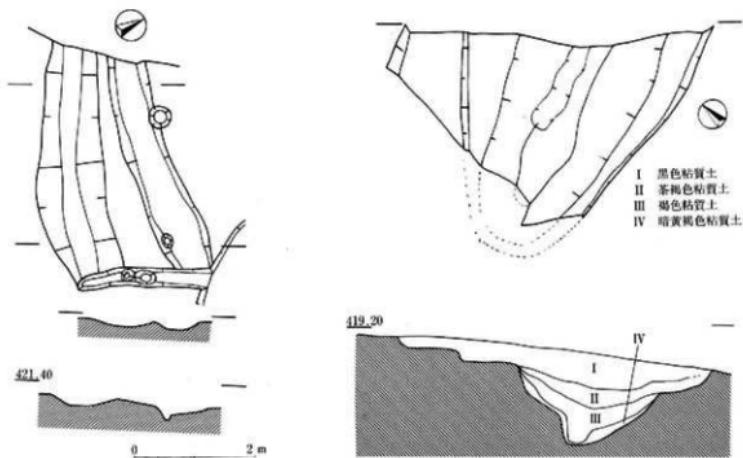
III-22 小鐵冶址

### 1号溝址

遺構（11図、III-3） 調査地下段の4号住居址東の再地すべり状地形上にある。形態は不整形で、西壁が10cmの掘り込みになる。



41図 1号溝址出土土器実測図（1：4）



42図 2号（左）・5号（右）溝址実測図（1：40）



III-23 2号溝址

遺物（41図） 出土量は比較的多いが、大部分が小破片である。器種には古墳時代の土師器壙(2)・甌(3)・甕(4)があり、これらは4号住居址の項で記述した。平安時代では土師器壙(1)・鉢・小形甕・須恵器壙・蓋、灰釉陶器碗がある。

#### 2号溝址

遺構（42図、III-23） 調査地上段の5号住居址南側に掘り込まれた浅い溝である。等高線を縦断する方向に2条あり、幅0.7~1.2m・深さ10cm程の規模で、横断する幅30cm・深さ18cmの溝で終結する。出土遺物は確認されない。

#### 3号溝址

遺構（43図、III-24） 調査地下段の頂部に位置し、北から南方向に傾斜する。北側では並行して2条認められるが南では1条になり農道による堀切りに至る。幅1.0~1.5m・深さ20~30cmの規模になる。

遺物 土師器壙・小形甕・須恵器壙・甕、灰釉陶器碗片が出土しているが、図上復元可能なものはない。

#### 5号溝址

遺構（44図、III-25） 調査地の下段に位置し、調査では溝址の南端部を露呈したにすぎない。断面形態は3段に掘り込まれ、1段2.6m・2段2.15m・3段1.6mの規模になり、3段の地表からの深さは76cmを測る。溝方向は東へ傾斜する。

遺物 出土量は少なく、土師器壙・甕・須恵器壙・甕片がある。

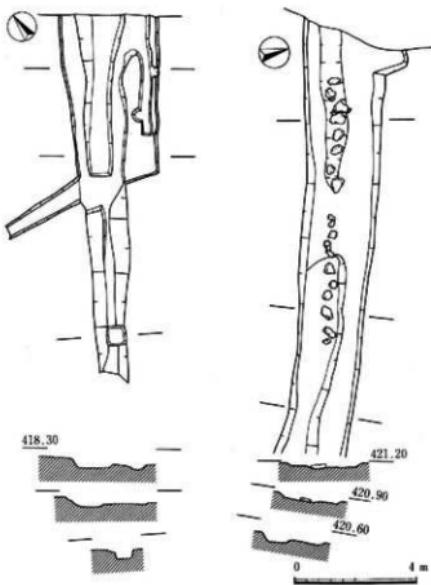
## 7 近・現代の遺構

#### 4号溝址（道路址）

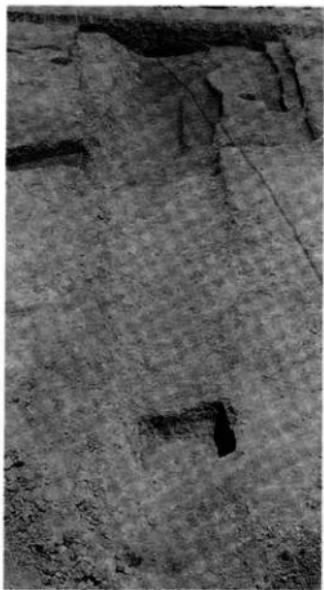
遺構（43図、III-26） 溝状落ち込みを呈するのは調査地上段のみに認められる。等高線を縦断し、下方東端は堀切り沢を呈する。調査時では廃道化し、畑として地目利用されていたが、公園上では赤線道路の位置にある。堀切り沢を登り始めた緩斜面には扁平自然礫が一列に掘え置かれる。溝状になった道路の泥塗からの対策遺構と考える。出土遺物はない。

#### 6号溝址

遺構 調査地上段の北緩斜面上に掘り込まれる。この溝址に並行して連続しない数条の落ち込みが認められることから、そう古くはない時期の畑作深耕によるものと考えられる。



43図 3号（左）、4号（右）溝址実測図（1:160）



III-24 3号溝址



III-25 4号溝址（道路址）



III-26 5号溝址

遺物觀察表

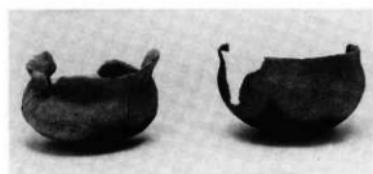
番号	種 別	器 種	法 量			遺 存	調 整 等
			口径	底径	器高		
1号住居址 (13図)							
1	土 師 器	环		8.8		脚部1/4	ヘラミガキ、黒色処理
2	#	小 形 瓶	14.6			口縁部3/4 体部1/2	内面頭部ヨコハケ
3	#	鉢	16.5		12.6	4/5	ハケ
2号住居址 (15図)							
1	土 師 器	环	12.0		7.4	2/3	外面底部ヘラケズリ
2	#	#	12.5		7.5	1/2	内面ヨコヘラミガキ
3	#	#	13.8		6.9	口縁部1/4 以下完形	黒色処理
4	#	#	15.8		6.7	1/3	内面ヨコヘラミガキ、黒色処理
5	#	高 环	15.4			環部完形	細かいヨコヘラミガキ
6	#	短 頤 瓶	12.2	6.2	13.7	口縁部1/3 以下完形	ハケ
7	#	甌	8.2		9.4	口は完形	ハケ
8	#	瓶	16.2	4.6	15.5	口縁部1/2 以下完形	ヨコナデ、指痕
9	#	甌	16.6			体部上半 完形	内面タテハケ
10	#	#	19.2			口縁部0.5 cm、体部1/3	内面ナデ
11	#	#			6.2		
12	土 製 品		5.3		2.4	完形	
4号住居址 (18図)							
1	土 師 器	环	12.5		4.8	1/3	
2	#	#	13.9		9.9	完形	内面ヘラミガキ
3	#	#	12.9		7.0	1/3	外面下半ケズリ
4	#	#	17.2			1/5	
5	#	高 环	13.6	8.5	10.4	4/5	内、外面ヘラミガキ
6	#	小 形 瓶	14.6		15.4	3/4	外面底部ケズリ
7	#	甌	18.0				ハケ
8	#	#		6.6			ハケ
9	#	#		5.9			タテハケ
10	砾 灰 岩	砥 石	2.9		1.1	欠損品	四面使用痕
10号住居址 (20図)							
1	土 師 器	环	15.8		7.9	1/2	
2	#	高 环	15.0			環部完形	ヘラミガキ、黒色処理
3	#	#	15.8			1/5	#

番号	種別	器種	法量			遺存	調整等
			口径	底径	器高		
4	土師器	高環		10.0		1/4	ヘラミガキ
5	〃	小形甕	14.0			1/4	〃
6	〃	甕	16.8			1/4	
7	〃	〃		6.6		3/4	内面ハケナデ、外面底部ヘラケズリ
8	滑石	有孔円板	1.9		0.25		両面擦痕
2号土壤(21図)							
1	土師器	高環	18.7			1/2	ヘラミガキ
2	〃	鉢	14.3		12.0	4/5	ハケ
3	〃	小形甕	16.0		18.8	1/2	〃
4号土壤(23図)							
1	土師器	甕	18.8			3/4	内面ヨコハケ、外面タテハケ
5号土壤(23図)							
2	土師器	環	17.0		11.0	3/4	ヘラミガキ、黒色処理
3号住居址(25図)							
1	土師器	環	12.9			1/4	ロクロ、内面ヘラミガキ、黒色処理
2	〃	〃	14.3			1/4	ロクロ、黒色処理
3	須恵器	〃		5.3		底部1/2	ロクロ、回転糸切り
4	〃	〃		6.4		〃	〃
5	〃	四耳壺		14.4		1/3	外面タタキメ
6	滑石	紡錘車	3.8		1.7	完形	
5号住居址							
1	土師器	環	13.8	6.5	4.2	4/5	ロクロ、ヘラミガキ、黒色処理、回転糸切り
2	〃	〃		6.5		底部完形	ロクロ、黒色処理、回転糸切り
3	〃	〃		6.1		1/2	ロクロ、黒色処理、ヘラケズリ
4	〃	甕				体部下半 完形	内、外面ヘラケズリ
5	〃	〃	21.6	7.6	26.0	ほぼ完形	内面ハケ、外面タテケズリ
7号住居址(30図)							
1	土師器	環	13.0	5.4	4.2	1/4	ロクロ、ヘラミガキ、黒色処理、回転糸切り
2	〃	椀		7.2		高台完形	〃
3	〃	甕		5.3		底部完形	ロクロ、回転糸切り
4	須恵器	環	12.9	6.5	3.8	1/2	ロクロ
5	〃	〃	13.2	6.6	4.4	3/4	〃
6	〃	長頸瓶				肩部1/2	〃
7	土師器	甕	24.0			体部上半 1/3	ロクロ、ヘラケズリ、内面ヨコハケ

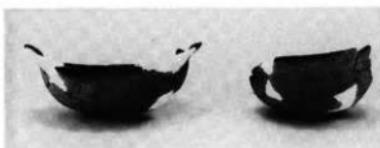
番号	種別	器種	法量			遺存	調整等
			口径	底径	器高		
8	土師器	甕	26.5	5.0	29.6	1/5	ロクロ、ヘラケズリ、内面ハケ
8号住居址（31図）							
1	土師器	甕	10.4				ロクロ
9号住居址（33図）							
1	土師器	环		5.3		底部完形	ロクロ、回転糸切り
2	須恵器	#	11.0			1/5	#
3	#	#	11.7	6.5	3.8	1/2	#
4	#	#	12.5	5.4	3.6	口縁部1/5 底部3/4	#
5	#	#	14.1	6.2	4.0	1/4	#
13号住居址（35図）							
1	土師器	环	13.3			1/4	ロクロ、ヘラミガキ
2	須恵器	#	12.8			1/6	ロクロ
1号溝址（41図）							
1	土師器	环	12.2	4.7	3.2	4/5	ロクロ、回転糸切り
2	#	罐					ハケ、内面指痕
3	#	瓶	12.3	1.6	10.4	4/5	ハケ
4	#	甕		6.7		底部完形	ヘラケズリ



SB 1 - 3



SB 2 - 1 + 2



SB 2 - 3 + 4



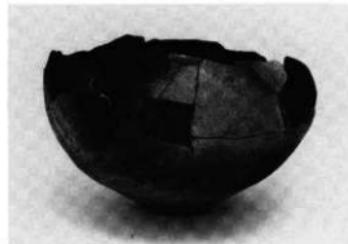
SB 2 - 6



SB 2 - 7



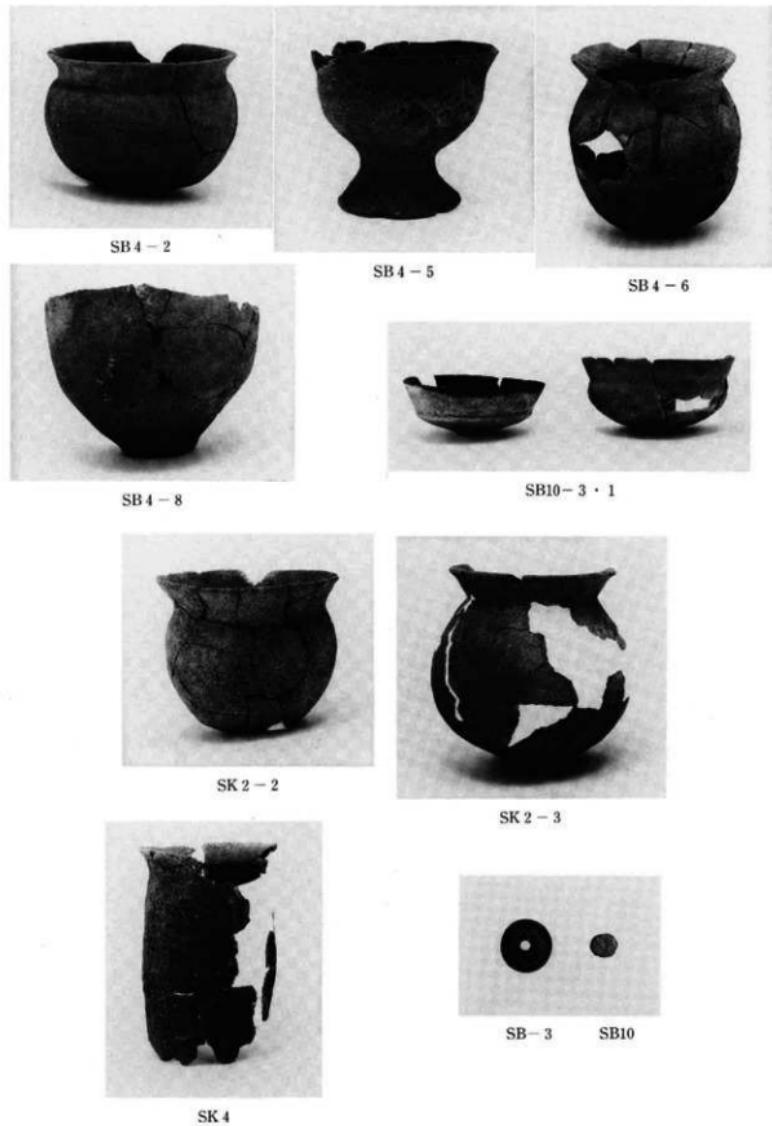
SB 2 - 8



SB 2 - 11



SB 2 - 9





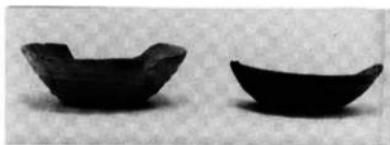
SB 5 - 1



SB 5 - 4



SB 5 - 5



SB 7 - 5 + 4



SB 7 - 7



SB 8 - 8

## IV ま と め

調査地は清水沢とふくろ沢に挟まれた舌状台地状地形になる。遺跡の範囲は地形上から南北約210m・東西120m前後と推定されるが、遺構の分布と微地形から考えると今回調査した地点はその核芯部ではなかろうか。即ち古墳時代では下方の舌状丘陵先端の地形変換点、それも等高線上に3軒の住居が構築されている点、上方の緩斜面では平安時代住居群が重複しながら存在することを重視する必要があろう。また5号住居址北側は傾斜を有し、古代以前の遺構は確認されないし、南側平坦部にもないことはこれを裏付けている。また3号住居址はカマドの存在が確認されなく、小鍛冶遺構の存在から生活跡とは考えにくく、これより下方の傾斜面には住居構築の可能性は低い。ただし丘陵高地に存在することから調査地の上方へ延びていることは否定できない。

古墳時代では住居址4軒・土壙2基が検出されている。下方の地形変換点に構築される1・2・4号は主軸(東西)が短く、等高線に沿って横長の隅丸形を呈する。規模も1辺4~5m代で、平坦地のものと比較すると小規模なものである。掘り込みは西壁が深く4号では47cmを測る。これらは地形の制約を受けた結果と考える。カマドは西壁中央に設置された石芯両袖形のものと推定され、4号はほぼ完存し、2号では支脚石のみを残す。4号の煙道は割貫き方式のものである。2・4号はカマド部を除き西半分の壁下に周溝状遺構が認められ、排水施設と推定する。4号の南壁には集水用途と考えられる土壙が存在する。主軸の方向はN49°~57°Wの範囲にある。これに対し上段遺構の10号は下段のものよりやや趣を異にしている。方形形態で規模が大きく、掘り込みが浅く、主軸方向はN23°Wである。緩斜面立地によるものであろうか。2号住居址における火災痕は住居廃絶時以降のものと考えられる。カマド構築石材が少ないと、カマド周辺に完形に近い土器群がそのままの位置に残存することを根拠とする。そうすれば1.4m北にある1号は罹災から考慮して、この時には存在していない可能性が強く、少なくとも2時期に亘る村落である。遺物は2・4号を除き出土量は少ない。2号土壙の小形甕に古相が見えるものの他の遺構からのものは相異が認められない。有孔円板等の存在から6世紀前葉の年代を求める。ただし4号土壙は後業以降のものである。

次にこの遺跡に足跡を残したのは平安時代人である。住居址群は上段の緩斜面にあり、更に標高上方に展開する。13号のみ下段に位置する。該期では7・8・12号、9・11号が重複関係にあり、番号順に新旧の時間差を有する。上段の遺構規模は7号の5.04mを最大に、5号の3.3mを最少数値を測る。主軸方向はN40°代Wを指す。カマドは西壁中央に構築するのを基本とするが、9号旧・13号では北壁に設けられ、13号の主軸方向はN68°Eを指す。形態は石芯両袖形のものであるが構築石材は全て抜きされる。煙道は古墳時代同様割貫き方式である。遺物の出土量は少なく、破片出土のものが多い。時間差もそれ程窺えない。須恵器什器類・灰陶器碗類の存在、5・7号に見られる丸底甕類の特色等から10世紀前半の所産と考える。再びすべり状地形の覆土は黒色粘質土で、この土層には該期の土器師・須恵器を包含しており、更に古墳時代の4号住居址東壁付近を削り落し、1号溝址中に4号住居址に付属するものと考えられる土器が出土している。再びすべり状地形は古墳時代以降、平安時代にかけて形成されたものと推定される。もっと時間を限定すれば該期集落展開以降であろう。再びすべり状地形上に黒色粘質土の堆積後、3号住居址、1・3・6~8号土壙が掘り込まれる。特に下段の地形変換点にある6~8号土壙は焼土・焼土塊化した壁面になることが注目される。3・8号は橢円形を呈し、6・7号は隅丸長方形の形態になる。8号は上面壁に焼土が認められる程度であるが、他は側壁全面及び底面まで焼土化し、3・7号の壁は還元焼土塊化する程の火熱を受け、底面に炭化物を残し、7号の6層には厚さ11cm程の炭化物層を形成する。これを加熱土壙と呼称する。規模は7号の長軸1.40m・短軸1.04m・深さ55cmが最大のものである。3

号から土師器环小破片が数点、6号に小円窓2個が覆土中から出土したにすぎず、7号・8号からの出土は確認されない。火葬場とも考えたが骨片1点すらない。土器焼成跡でも焼き損じ品1片も出土していない。用途不明な遺構である。川中島扇状地の南宮遺跡等平坦地の遺跡からも発見されているがやはり出土遺物は確認されていない。年代比定では3号住居址の四耳壺の例から11世紀代をあてる。

さて次の課題として古墳時代・平安時代遺跡の性格・背景の問題がある。犀川方向に突出する舌状丘陵先端に位置し、両側には沢が流下しており、日当り・飲料水の確保等絶好の生活環境にある。既に農耕を主体とする生産基盤を確立して久しい年月を経ている。村史では谷水田経営での生活を考えている。現在は可能でも古代においてはどうであろうか。日照・面積等の制約があり、冷水での栽培は収穫に期待を持てない等々から不可能と思える。犀川は低湿地を形成するような河川でなく、急峻で遺跡先端地形に見られる崖をつくり出す程の下刻浸食の著しい河川である。犀川による水稻耕作地も考えられない。それでは週上する蛙・鱈を捕獲する季節的・一時的なキャンプサイドとも考えられるが、前面の崖、当時の河床面からの比高差は数10mあったものと推定され、捕獲基地とするならばもっと好条件の地が他にある。畑耕作を主体とする生産基盤が考えられる。近隣地域の様子を県史から拾うと、土尻川水系の小川村では12遺跡中古墳・平安時代各1遺跡、中条村では17遺跡中古墳時代1・平安時代5遺跡、犀川流域の信州新町では49遺跡中、古墳2基・古墳時代1・平安時代8遺跡、長野市七二会地籍では18遺跡中古墳時代2・平安時代11遺跡、同小田切地区では20遺跡中古墳13基・平安時代2遺跡あるにすぎない。古墳時代は総計5遺跡にすぎなく、遺構も明確になっていない。平安時代では七二会地区が突出した遺跡数を示すが総計27遺跡で全体の26%しかない。畑作での生活を支えることが困難であったことを示す数値といえよう。また信州新町と小田切地区にしか古墳が構築されていない点注意する必要がある。このような観点から柏尾南遺跡における古墳時代と平安時代では内容において相異があるものと思われる。古墳時代では明らかに2期に亘る小規模集落が存在し、それも6世紀前半に比定されることは前述した。信州新町には2基の古墳が登録され、『武富佐古墳』の報告書によれば3基1群として存在したようである。同町の該期の遺跡数が増すことは確実であろう。小田切地区では13基の古墳が登録されるものの遺跡は確認されていなく、立地的に考えて存在の可能性は少ない。小田切の古墳群は吉久保古墳群（8基）と馬神古墳群（4基）に大別され、馬神1号墳は前方後円墳、2号墳は竪穴系の石室が予想されている。馬神古墳群は柏尾南遺跡より直線にして3.5km下流の扇状地頂部の山頂に位置する。今だに古墳群形成の主体的集落は確認されていないが、扇状地への出口に立地することを重視し、犀川を支配した豪族の奥津城と考える。柏尾南遺跡はこの点に注目し、時期的に若干の問題はあるが、この古墳群との積極的な係わりを推察したい。即ち犀川を利用する物資の流通・軍事的移動等の物・人・舟の移動を監視する見張所的役割を有した遺跡と考える。山間地への進出では後続性が認められないし、短期間のうちに集落は終焉を迎える。平安時代に至ると全国的に山間地に進出する傾向にある。人口増と莊園による耕作地開発、職能集団の形成が主として考えられる。集落としては小規模なもので、地形からの數軒単位のものであったであろう。柏尾南遺跡は中でも大きな集落と思われるが、一時期複数単位の構成であったことが重複関係から窺える。生産背景には畑作が積極的に考えられるし、特に重視するのは小鎌冶遺構の存在である。山間地の遺跡では応々として認められ、七二会地区二十三夜塚遺跡に鉄滓の出土があり、信更地区宮ノ下遺跡・篠ノ井地区猪平遺跡では住居内小鎌冶址が発見されている。当遺跡でも3号住居址に小鎌冶遺構と羽口、7号住居址から鉄滓の出土がある。鉄製道具作り又は修繕の用に供したものであろう。本地師等の工具を必要とする職能集団の活躍を思い浮かべる。単なる莊園拡張のための進出だけではないものと考え、新たな調査に期待したい。

## 報告書抄録

ふりがな	かしおみなみ いせき							
書名	柏尾南遺跡							
副書名	長野市消防局七二会分署庁舎建設地							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第79集							
編著者名	矢口 忠良							
編集機関	長野市教育委員会埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-22 長野県長野市小島田町1414 TEL (026) 284-0004							
発行年月日	1998年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
柏尾南	長野県長野市 七二会 柏尾南 561他	市町村	遺跡番号	36° 36' 18"	138° 5' 16"	19970729 19970911	2605	長野市消防局 七二会分署庁 舎建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
柏尾南	散布地 集落跡 道路跡	縄文 古墳 平安 近・現代	豎穴住居 土壙 豎穴住居 土壙 小鐵治 溝 道路跡	4軒 3基 9軒 7基 1基 4条 ピット群	黒曜石・チャート 剝片 土師器、有孔円板、 石製紡錘車、砥石 土師器、須恵器、 灰釉陶器、石製紡 錘車、羽口、鐵滓			うち1軒に小鐵治 土壙のうち4基が 加熱土壙

### 長野市の埋蔵文化財第79集

### かしおみなみ 柏尾南遺跡

平成9年3月19日 印刷  
平成9年3月25日 発行

編集 長野市教育委員会  
発行 埋蔵文化財センター  
印刷 鬼灯書籍株式会社